なる希望ある筈なく、從て佛果を得るに難し、又暗照とて、佛教の教理を辨せず、只默然として座禪したるのみにては、到底佛果を得ず、必らず以上發心大願に伴ふ、工夫によりて始めて安心を得、是れを大願成就と謂ふ。諸道理は一つなり、予が茶道に意進理進業進の順路を說く所以、蓋し此理に外ならず。然るに此三要素は、決して順逆あるに非らず。時として、業進理進意進と轉倒して上達するとあり、即無意思に稽古したるに、次第に業進むに從ひ理進み、遂に意進みて妙所に達するとを得ざるに非らず、例令ば彼の最初はでも坊主なりし者が、眼に一丁字無くして、座禪の結果悟りを得るが如し。然れ共、結極意進理進業進と循環して靜止すると無きものなり。即ち意進むに從ひ理進み、理進めば則ち業進み、業進む時は意從て進むが如く、終始循環すると幾度かにして、遂に大悟するなり、白隱禪師曰く、大悟十八遍小悟其數を知らずと、蓋し此回數を謂ふなり。

一　點茶は無念無想の法

凡て點茶の秘事は、此無念無想の外なし。無念無想にして、一段の點茶出來得れば、是れを手前の達人と稱す。彼の異樣の點方を多く記臆したりとて、決して名人とは云ふ可からず。然らば無念無想とは如何なるか、何にも思はぬ事なるか、即ち座して空々寂々眠れるが如く死するが如きものか、否然らず、死物となりては活氣なし、無心無意と混同せざるとを要す。斯の如きを默照の禪と謂ふ。一念も

なし思ひもあらぬ空々に有るは風勢の行衛なりけり」にて、例令ば仰で天を望むに空々たり、無一物か、否空氣あり、空氣を排除すれば甚麽、曰く勢氣あり、勢氣無くむば甚麽、眞如實在す、眞如も無くんば甚麽、是れ斷見の外道に墮す、人も妄想も臆想をも排するも、尙本來の面目其内に存す、本來の面目無くんば死物なり、故に曰初心の無念無想は空々裡、寂々底の無心にして、達人の無想は空々裡中寂々底中の有心なり、是れを佛敎にて有心の心無心の心と謂ふ。

「思ひなく巧みもあらぬ無想には虎さへ爪の置所なし」とは、劍客の口にする無念無想の傳法なり、茶道の點前も、六寸の寶劍を握て、主客共殺するの眞劍勝負なり、死物の體を以て能く當る所にあらず。上手ぶらむとも粗忽すまじとも、自慢巧者の妄想抔も排して、

有心中の無心、即眞正の無念無想にて手前をなせば、五體の活氣客の氣を呑殺す、是れを氣位と謂ふなり。

一　主客氣位の事

氣位とは、前節に說きたる如く、無念無想の自在を得たる時に於て、無象の活氣身體に生じて、對人を呑却する心地なり。彼の劍客が氣を丹田にこめて身を構ふるや、實に當るべからざるの氣位を生ず。是れを劍道に氣當りとも稱す。此氣當りを以て對すれば、身寸鐵を帶びずして敵の氣を奪却すべし。彼の荒木政右衛門が、奉書の紙を以て敵に對したる、利休が柄杓を構へたる時は一寸の隙もなくして、切り込む所なかりし抔の逸話も、皆此理に外ならず。點茶に於ても、

主客共此氣位を要す。是れを俗に客の氣を呑むとも、或は客に呑まるゝとも云ふ。試みに先づ自己の氣位を驗せむと欲せば、高臺に登りて幾百人に向ひ辯舌を弄せよ、初めは必らず聽衆の爲めに氣を呑まれ、言語澁り脚下震動し、心臟の皷動を高むるの現象あり、次第に熟練するに從ひ、假令幾千人の聽衆あるも、眼下に瞰下して先づ之れが氣を呑却し得るに至るは事實なり。又點茶に於ても、同輩の稽古人間に於ては、平然として手前し能ふも、貴顯に献茶するか、或は自己より老練家の前に於て點茶する時は、周章混雜必らず平素に似ざるものなり。是れ即ち氣位の備はらざる證なり。夫れ斯の如く、主客の氣位相互に優劣を生ずる間は、妄想臆念のある時に、全く無念無想に成り能はざるが故なり。主客氣位互ひに一寸の弛みも無きを、間に髮の容れずとも、石火の機とも稱して、上達の人にあらざれば能はざる所なれ共、其主客の間一髮を容れざる有樣こそ、眞に點茶の妙所、即ち面白味の所にて、是れ以外に効能も無く愉快もなし。若し有りと謂ふ人あらば、畢竟手先きの藝に迷ひ、道具飲食の快を貪るのみ。然らば其氣位は如何にすれば修養し得るや、曰く丹田を養成するの外、決して便法あるとなし。然らば丹田の養成は甚麼にすれば可なるや、曰く只點茶にあるのみ。

一　丹田の養成

上來幾度も翻覆して丹田を說けるが故に、更らに喋々するを要せざるが如しと雖も、點茶の秘傳とする所、及び其目的は、單に此丹田

の養成に外ならず。即ち茶禪一味も詮ずる所、此丹田養成に歸するなり。點茶の時に於て、氣丹田に滿たざれば、全く拍子抜けて猿眞似に異ならず。抑も名人悟道の士となれば、劍道にても禪學にても點茶にても、鋭氣體内に充滿して、前後左右天地六方に向て、一點の隙間なきが故に、劍道の名手たる、柳生但馬も澤庵には、長穂の鎗も立たざりしとか、又利休の點茶中、不意に切り込まれたる太刀を、柄杓にてハタと受け留めたりとかの逸話は、眞説なりや否やは第二として、兎に角其間髪隙なきに譬へたるものなり。佛敎に於ても、不動多聞天を信仰す。之れ迷信加護を祈るにあらず、其心の動かぬとを不動と稱するのみ。多聞天も武裝の嚴肅なるを懼れしむるにあらず、心意の勇猛心を表するなり、全く何れも寓意擬勢なり、點茶一手前中は、宜しく不動多聞天の如くならざる可からず。さりとて木佛金佛の如く、固くなるにあらず。氣を丹田にこめて、間髪のゆるみなきを謂ふなり、而かも手足は自由自在なり。前説の氣位も畢竟するにこれより生ず。

一　點茶體用辨

茶道に於ける體用の本旨は、既に總論に於て之れを述べたり、故に茲には、只點茶するに就ての體用辨を試みんと欲す。體用の語は曩きに述べたる如く、主客陰陽の意に當り、或は理論的事實的の意を含み、時としては主觀的客觀的の意味に適するとあり。是れ畢竟時と所に應じて其意味を異にせるなり、即ち主は體にして客は用なり、

又陽は用陰は體、理論的は體にして事實的は用、又主觀的は體にし又客觀的は用なるが如し。假令ば主人なる體ありて客なる用あり、水と謂ふ體ありて火と云ふ用を生じ、天地陰陽の體より造作して、草木國土の用と顯はれ、主觀的に禪定を工夫して、容觀的に動作を成すが如きは、是れ皆體用の相照應せるものなり。而して其體用の變化より之れを觀察する時は、體は用となり用更らに體と成りて循環し、遂に體用一に歸し、實に體用の別つ可きものなきに至りて止む、即ち亭主なる體ありて客なる用を生じ、客更らに體となりて數奇屋の用を生じ、數奇屋の體ありて茶の湯の用生じ、茶の湯の體ありて釜の用生じ、釜の體ありて茶碗の用生じ、茶碗の體ありて茶の用生じ、茶の體ありて茶筌の用を生じ、茲に點茶し始めて主客の用を生ずるに至り、幾回となく循環底止するを識らず、是れ差別門より觀察せるが故なれ共、元來體用は二にして不二なると、地球に於て觀測點を異にするが故に晝夜の差別を生ずるも、地球其物に至りては、晝夜の差別なきが如し。此理を悟入すれば主客なきに至る。斯くの如く主客無きを、佛道に於て無賓主といふ。

一　無賓主の茶

前章に於て、茶道の體用に於て一言し、體用の詮ずる所無賓主なるを述べたり。抑も無賓主の語は、臨濟錄に載する所なり。即ち無差別より觀て無賓主と謂ひ、差別より賓主歷然と謂ひ、或は更らに之れを評解して四賓主と成す。即ち賓中の主、主中の賓、賓中の賓、

主中の主是れなり。

如レ斯四賓主を區別するも、畢竟無賓主に歸すると、體用一に歸するが如し。去れ共此賓主の語は、古來禪客の難透とする所實參實究せずんば、主中の主賓中の賓を悟了するに難かる可しと雖も、茶道に於ては之れを實際に實行するに在り。即ち無賓主の意味は、主觀的に於ては、禪的工夫を凝らすにあれ共、平易に解釋すれば、只主人と客人との間に於て、心に隔て無く胸襟を開きて、一室に親交するの有樣を指して、無賓主と謂ふのみ。然らばとて主客無作法に禮を崩すにあらず、其動作言語に於ては差別歷然たり。是れ體用の二にして不二、不二にして二なるが如く、賓主歷然として、而かも主觀的に於て無賓主なるこそ、茶の湯の極意なれ。

一　和敬清寂の解

利休居士、始めて茶道は和敬清寂にありと謂ひしより、苟も茶道に入る者、皆口に此語を稱へて金言と爲す、而かも其之れを口にする者、必らずしも其義を解せりと許す可からず。請ふ聊か之れを辨せん、世に和敬清寂の文字を、和敬靜寂と書す者あれ共誤なり。何となれば和敬清寂は、一字々々の意味を四個集めたるものにて、和敬と靜寂の對句にあらざればなり。之れを一字宛の意味に考ふれば、靜と寂とは殆と其意を同ふし、玆に此字句を用ふるの必要を見ざるなり。

抑も和とは和融の意にして、夫婦能く和し、朋友相和合して親睦す

るの義なり。茶道は和を以て第一位とす。然るに茶人程表面相和するが如く見へ、裏面に人を誹謗し反目する者尠しとするは、蓋し古來免れざる通弊と見え、今其一例を擧ぐれば、千利休と今井宗及は相反目し、千道安は古田織部に不和、千宗旦は實子宗拙を放逐し、山田宗編を破門し、藪内紹智は藤村庸軒に不快なりしが如きは著名のものたり。かゝる次第は、たとひ古人と雖も、決して後世に模倣す可からざるとなるべし。

敬とは尊敬の意にして、主客は相互ひに常に敬禮を以て交はらざるべからず。若し此敬禮の法を亂れば、遂に茶道は客觀的に於ても、主觀的に於ても廢絶するに至る可し、蓋し此意は專ら主觀的の敬意を謂ふなり。然るに現今客觀的の形式に於ては、敬禮の整然たるが

如く見ゆるも、主觀的に於ては、全く輕薄の觀なきを得ず。清とは、讀で字の如く、清潔を字句する意味にして、器物萬端の洒掃は勿論、復た主觀的の心の清淨潔白ならざる可からざるの敎へなり。遠州公の書捨文にも、「心清らかならざれば早瀨の鮎水底の鯉も其味ひあるべからず」とあるも此意なり。

寂は寂滅の意にして、全く身心の寂境を指して、妄想臆念の發せざるとなり。即ち一と手前する間にも、無念無想の域に達して寂滅せざるべからざるの敎へなり。然れ共、此寂を只物靜かとのみ解し、心を大死底に措くものとのみ思ふも、未た悟らざるの語にして、煩腦即菩提てふ境の、活潑々地の妙所こそ本來の面目なれ共、かゝる事は禪學上のことにして、茶道に於ては、物靜かなる心を以て主客の

意とすと解して誤りなからむ。宜しく一と手前の間にも此寂境を去りては、茶道に叶はざるとを悟るべし。茶禪一味の極意は、只此寂の一字にあるのみ。以上の如く茶道は、和敬清寂の四字に、一切の極意を含有し、更らに此四字に出づるの意味なし、茶人にして此四字を日常に實行し能ふ可くむば、茶道の大事了れりと謂ふも、敢て過言に非ざる可し。

一　茶道は不立文字以心傳心の法

元伯宗旦翁の歌に、「茶の道は心に傳へ眼に傳へ耳に傳へて一筆もなし」と。蓋し此歌意は、能く茶道の不立文字以心傳心的なるを述べ盡したりと謂ふべし。本來茶道の極意は、禪味を出でざるとは、上來屢々記せるが如くにして、而かも其禪味は、言句舌頭の能く傳ふ可きの法門に非ざるをも說きたり。夫れ然り而らば茶道も、亦以心傳心不立文字ならざる可からざるの斷案を下すに憚らざるなり。宗旦亦此大乘的の茶道を觀破せりと云ふべし。抑も今日の人にして、茶道が以心傳心なり、不立文字なりと稱すれば、殆ど奇異の感を爲す者なきに非ざる可しと雖も、試に思へ、茶道本來の目的を、苟も茶道と稱へて之れを茶藝と爲さゞる所以のものは、畢竟其本旨、喫茶の點前、或は懷石料理の巧拙、客振如何を指すに非ずして、內には自己の面目を照見し、外は處世の活禪を試むるにあり。かゝる本旨に至りてこそ、耳の傳ふるものあらず、目の視るべき物紙の記すべきなし。故に余は之れを、不立文字敎外別傳の法と謂ふなり。

一　茶道は草より入りて草に終る

「稽古とは一より習ひ十を識り十より歸へる元の其一」と、世間百般の稽古は、悉く此歌意を漏るゝとなしと雖も、就中茶道に於ては、最も此法則に適中するものなり。例令は、最初は先づ薄茶の平手前より、濃茶茶の湯の傳授事を習ひ、遂には臺子の奥傳に迄進みて皆傳し、然る後に其行路を顧みれば、茫々として更らに其足跡なく、元の薄茶は中々容易なるものにあらず。これ恰かも、字を習ふにいろはより進みて、三體四體の筆法を習得するも、元のいろは假名の能書家たるの困難なるに等し。此故に利休居士も、「手前こそ薄茶にありと聞くものを粗相に思ふ人はあやまり」と敎へられたり。是れ

單に手前作法に就きてのみならず、日常の起居動作に於ても然り、即ち茶席にての動作は、萬端規矩に叶ひ、又茶道に於ける理論は如何に研鑽すると雖も、平素の行爲にして道を脫すれば、未だ茶人として許す可からず。宗旦に因て實行的に紹介せられたる、吾が利休流と、他の諸流と根元に於て其趣を異にせる所以も、蓋し玆に存す。宗旦翁は、終生草より入て草に終られたり。草とは何ぞや、佗茶即ち是なり、彼の封建の時代、大名小名華を競ひ美を爭ひ、他の流之れに阿るに關せず、一風の草庵中頑として茶禪一味の悟道を說法せり。能く一を悟る者は十を識るを要せず、十を識る者と雖も、一を悟らざるものは、十を識らざるに均し。禪法は即ち一を悟るにあり。一を悟る者には八萬四千の經卷何の用をかなす。一切藏經を讀

誦すと雖も、一を悟らざれば、未だ佛の位にあらず。茶道亦然り、一碗の喫茶の趣旨を會得せば、何ぞ珍器重寶を翫弄するを要せむや、又面倒なる作法を習得するに及ばむや、如何に吾れは皆傳したりとて氣取るも、一碗の茶味を理會せざれば、是れ茶人にあらず。さりとて草より進みて眞に達し、更らに草に歸るにあらずんば、單刀直入的には悟り難し。世には茶は平手前にあり、何ぞ他の作法を識るを要せずやと、早合點する者あり、是れ亦誤なり。故に茶道には草より進みて眞に到るの方便ある所以なり。宜しく十を識りて一に歸す可し、佛敎に於て萬法歸一といふは蓋し此義なり。一何れの所にか歸すと謂ふに至ては、予は茶道の範圍に於て答ふ可き詮なし、參禪便道大死底の士と共に談せむのみ矣。

○ 喫茶法語集

一 澤庵和尙示茶人某書

（仙樵戯作）

編者曰、故山岡鐵舟居士は、無刀流の達人にして、嘗て相國寺荻野獨園老師に參じ、印可を得るに至りて、漸く劍道の極意を悟りたる人なり。居士常に門人に敎ふるに、劍は禪なりとの語を以てせられたりとぞ、即ち、「劍道の極意を何と人問はゝ墨繪にかきし松風の音」てふ歌は、居士の開悟的劍道の極意なり。實にや、古來其例尠からずと見へ、勇士柳生但馬守が、大德寺澤庵禪師に參じて、劍道の奥儀を、肇めて悟りたるとは、諸書に散見する所なるが、近來澤庵和尙が、柳生へ授けられたる、

禪語を引きて劍道を論ぜられし一卷を讀み、之れは是れ劍道のみならずして、其まゝ茶道に適中したる秘書なり、好し一番、劍は禪なり、茶も亦禪なり、然らば劍も茶に均しかる可しとの、三段論法を以て斷察を下し、玆に澤庵禪師に代りて、世の凡夫茶人に垂示を試みんと欲す。其當を得たるや否は、讀者の解釋に在り。元より澤庵が柳生へ授けたる示諭書を、そつくり其儘文意さへ違へず、只例證を茶に改めたる迄のゝ故、請ふ原書所持の士は、宜しく比較對照せられ、甚麽に劍法と茶道と酷似せるかを悟り賜へかし。文字文章は前に述べたる如く、勉めて原文の儘を用ゐたるは、是れ燒き直して、反て意味の變ぜんとを憂慮すればなり。

一無明住地煩惱諸佛不動智　無明とは、あきらかになしと申す文字にて候。迷ひを申候。住地とは、留まる位と申字にて候。佛法修行に、五十二位と申す事の候。其五十二位の内に、物毎に留るを住地と申候。是れとゞまると申す義にて候。とゞまるとは、何事に附ても、其事に心の留まるを申候。貴殿の茶道にて申候はゞ、客の模樣を見て、そこに心が留まり、客に賞られんと思へば、客の方に心が留まりて、手前の働が拔けて、客に氣を取られ候。是れを留まると申候。客の容子を見るとは見れ共、そこに心を留めず、釜の前に座すると均しく、上手振らんとも思はず、思案分別にも渉らず、柄杓をかちりと曳くやいなや、心を卒度も留めず、其儘下腹に力を入れて氣を弛めざれば、客の氣を追つ取て、

吾が氣客を呑むと謂ふ心地になり候。禪家にては把鎗頭に倒刺レ人來と申候。鎗とはほこのことにて候。人の持ちたる刀を我が方へ追つ取て、相手を切ると申すことにて候。貴殿の無念無想と被仰候義にて候。客にも道具にも我が身にも、卒度も心を留めば、手前の働きは皆ぬけて、客に氣を奪はれ可レ申候。客に心を置けば客に心を取られ、我が身に心を置けば、我が身に心を取られ候間、我身にも心を置く可からず。我身に心を引きしめて置くのも、初心の間習ひ入る時のことなる可し。茶杓にも心を置けば、茶杓に心を取られ、手前に心を置けば、手前に心を取られ候。貴殿御覺へ可レ有レ之候。佛法には、此留まることを迷ひと申候。故に無明住地煩惱と申候。

一諸佛不動智　不動とは、うごかずと申す文字にて候。智は智惠の智の字にて候。動かずと申して石か木の樣に、無性なる義理にてはなく候。向ふへも左りへも右へも、十方へうごく可き時には動きながら、卒度も留まらぬ心を不動智と申候。不動明王と申して、右の手に劍を握り、左の手に繩を持ちて、齒を喰ひ出し眼をいからし、佛法を妨げん惡魔を降伏せんとて、突き立て見居候。文字の樣なる姿なるが、何國の世界に隱れて被居候にてはなく候。容ちをば佛法守護のかたちに作り、體は此不動智を體として、衆生にも見せらるゝにて候。一向の凡夫は恐れをなし、佛法に怨みを爲さじと思ひ、悟りにちかき人は。不動智を表したる所を悟り、一切の迷ひを晴らし、即ち不動智を明らめ得れば、我身即不動明

王なる程に、此心法を能く修行したる人は、惡魔もいやまさぬぞと知らせむための、不動明王にて候。然らば不動明王と申すも、人の心の動かぬ所を申候。我が心を動轉せぬとにて候。どうてんせぬとは、物毎に心を奪はれぬ事にて候。物に心を留れば物に心を奪はれ候。物毎に心の留まるを動と申候。物を一目見ても、心を留めぬを不動と申候。なぜになれば、物に心が留まり候へば、色々の分別が胸に出て候。胸中色々に働き候。留まらぬ心は、動いて動かぬとにて候。譬へば茶を點つる節、先づ十種の道具を扱ひ候へば、跡に心を留めずして、あとを捨て跡を捨て候て、夫れ〳〵道具に働きを缺かぬにて候。十色の道具に十度心を動かせども、一品にも心を留めざれば、次第に次から次へと、働はかけぬものに候、若し又一品の道具ばかりに心留まり候へば、次の道具を扱ふに間がぬけて、手前の働らきぬけ可申候。千手觀音には、手が千御座候。弓を持ちたる手もあり、鉾を持ちたる手もあり、劍を持ちたる手もあり、樣々の手御座候。若し弓を持ちたる手に心が留まらば、九百九十九の手は、皆用に立間敷候、一所に心留めぬに依り、千の手が一つも用に立たぬは無し、觀音とても、身一つに千の手が何しに可有之候や。不動智が開け候へば、假令身に手が千あるとも、皆役に立つといふとを、人に示さむ爲めに作りたる容ちにて候。譬ば一本の木に向て、其内の赤き葉一つに眼を留むれば、殘りの葉は見へぬなり、葉一つに目かけずして、唯一本の木に何心もなく打向い候へば、數々の葉歸らず見へ

申候。葉一つに心を留め候へば、其一つに心を取られ候て、殘りの葉は見へず候。一所に心を留めねば、百千の葉皆々見へ候。此心得をしたる人、則ち千手千眼の觀音にて候。然るを一向の凡夫は、唯一筋に、身一つに千の手千の眼がまします、難有しと信じて、又なまもの識りなる人は、身一つに千の眼千の手が何しに有らん、戯事よと破りそしるなり。今少しく能く知れば、凡夫の信ずるにてもなく、又破るにてもなくして、道理を得て道理の上を尊び信じ候。佛法は物に寄せ物に表して道理を顯はす事にて候。諸道共に箇樣のものにて候。神道なども別して其道理と見及び候。有のまゝに思ふも凡夫、又打破もなほ凡夫にて候。其中に道理ある事にて候。此道彼の道さまゝに候へども、極まる所は、一心に落着候。扨て初心の住地より能く修行して、不動智の位に到れば、復た立ちかへりて本の住地の、初心の位に落ちつく仔細御座候。貴殿の茶道にて可申候。初心は身構へも、柄杓の持ち樣も何も知らぬものなれば、身にも心留まる事無く、只茶を品能く點つる斗りにて、何の心も無く候。然る所に樣々の事習い、歩み樣座り樣、柄杓の構へ心の置所、色々の事を教へぬれば、色々の所に心を留め、斯の如くせばよからむが、彼の樣にせば如何抔、兎や角力みがへり、殊の外窮屈なるとを、日を重ね年月をかさねて稽古すれば、後ちは體の備へも杓の構へも、茶杓茶筌の取扱いも、皆心に無くなりて、からりと唯先づ始めの何も識らず何心もなき時の樣になり申す可く候。これ初と終と同じ樣になる心持にて候。

一から十返數へまはせば、一と十と隣に成申候。調子抔も一のひゞき、一越より數へて無上と申高き調子に行き候へば、一の下と一の上とは隣に成申候。づゝと高きと、づゝとひきゝとは似たる物に成申候。佛法もづゝとたけたるは、佛も法も知らぬ人の樣に、人の見なす程に、かざりもなく成物にて候。故に初の住地の無明煩惱と、後の不動智とが一つに成申候、智惠はたらきの分は皆うせて、無心無念の位に落着申候。愚智の凡夫は、一向に智惠無き程に無念なり。又づゝとたけたる智者は、早智惠が入らざるに依りて、一切無想なり。なまもの識りなるによりて智惠が顏へ出て申候。おかしく候。今時分の出家の作法共。嘸おかしく被思召御耻かしく候。

一理の修行事の修行と申事の候　理とは右に申如くにて候。至りいたつては何にも不取合、唯々一心の捨樣にて候。毎々右に書附候如くにて候。然れ共事の修行を不仕候ては。道理斗り胸に有て、身も手も不働候。事の修行と申は、貴殿の茶道にてなれば、身の構へ主客作法の樣々の習ひ事にて候。理を知ても事を自由に働かねば不成候。茶杓茶筌の取廻し能くても、理の極りくらく候はゞ成間敷候。理事の二つは、車の兩輪の如くたる可く候。

一間不レ容レ髮と申事の候　貴殿の茶道に譬へて可申候。間とはあいだにて候。物を二つ合せたる間へ、髮筋も入らぬと申たるにて候。たとへば手をはつたと打つに、其儘はつしと聲出候。打つ手と聲の間は、髮筋程の間もなく聲か出候。手を打て後に聲が思案

をして、間を置て出るものにはなく候。打つとその儘聲は出候。若し客の容子に心が留まり候へば、間が出來候て、手前の働がぬけ申候。心がとゞまる故にて候。向の客の動作と我働の間へは、髪筋も不入程ならば、客の氣を我方へおつ取り候。禪の問答に此心ある事に候。佛法にては、こゝかしこ留まりて、物に心の殘るとを嫌ひ申候故に、留るを煩惱と申候。立切たる早川へ玉を流すが如く、波に乘てぽつぽと流れて、少しも留らぬ心を貴び申候。

一石火の機と申事の候　是も前の心持にて候。石をはつたと打といなや、ぴかと出る火の如く、打と其儘出る火なれば、間も透間もなき事にて候。是れ心の留る可き間のなきを申候。早き事と斗り心得候へば惡敷候。心を物に留めまじきといふが專らにて候。心がとゞまれば我心を人にとられ候。早くせんとて思ひまふけて、はやくせば、思ひまふくる心に心を奪はれ申候。西行の歌の中に

世をいとふ人としきけはかりの宿に
こゝろとむなと思ふばかりそ

と申歌は江口の遊女が讀みし歌なり。此歌を貴殿茶道の極意の相傳に被成、我と獨り心得られ候はゞ可レ然候はむ哉、心とむなと思ふ斗りにといふが、心得所なる可く候。是にて御合點可レ有候。禪宗にていかなるか是佛と問はゞ、向の聲の未だ絶ざる先に、手をはつたと打つ可し。また如何是禪と問はゞ、拳をさし上くべし。

如何是佛法の極意と問はゞ、其聲未だやまざるに、一枝の梅花となりとも、庭前の柏樹子と成とも云ふ可し。いふ事の由を答ふにてはなし、とゞまらぬ心を尊ぶなり。留まらぬ心は色にも香にもうつらぬなり。此移らぬ心の體を、神とも悦び佛とも貴び、禪心とも至極とも、眞如とも本性とも、這箇とも本來の面目とも申候。とくと思案して後に云ひ出し候はゞ。金言妙句にても、住地の煩惱にて候。石火の機と申も、電光の機と申も、ぴかりとする稲光の間に働を申候。譬は左衛門と呼かくるに、おつと答へたるを不動智と申候。左衛門と呼かけられて、何の用にて候やらんと思案して、後に何のぞといふ心は、住地の煩惱にて候。然らば、左衛門と申者の心得樣にて、物に留まつて物に動かされ、迷はさるゝ心をば、無明住地煩惱と申候。經に水よく物を轉ずれば、則ち如來に同じと有レ之候。物を轉ぜずして、物に轉ぜらるゝは凡夫にて候。又左衛門と呼れて、おつと答ふるは、諸佛の智なり。然れば佛と衆生二つなく、神と人とも二つなく候。此心の明なるを神とも佛とも申候。神道佛道儒道とて、道多く候へども、此一心の明なる所を申候。然れどもケ樣に書附申候事は、唯言葉にて心を講釋したるにて候。此心人々我身にありて、晝夜となく善事惡事ともに、皆此心の業によりて、或は國を起し、或は家を亡し候。其身の程々に隨て、よしあし共に心のわざに候へども、此心をば如何なる物ぞと悟り明らむる人なくして、皆心に迷はされ候。世の中に心を說く人不レ可レ有候。能明らめる人は、

稀にも有がたく見及候。たまゝ明らめ知り候ても、又行ふと成がたく候。此一心をよく説とて心を明らめたるにては有間敷候。水の事を能く講釋いたし候共。口はぬれ申さず候。火の事を能く説とても、口はあつからず、眞の水竈の火にふれてならでは、知れ不申候。書物を講釋したる迄にては、知れ申さず候。食物をよくとさても、ひもじき事はなほり申さず候。説人の分にては知れ申間敷候。世の中に佛道も儒道も、心を説き候とも、その説く如く其人の身持はなく候間。書物の上斗にては、心は明らかに知れぬものにて候。人々我身にある一心、本來の面目をとくと極め、悟り候はねば明らかならず候。又參學をしたる人が、心明らかならば、參學をする人も多く候へ共、それにもよらず候。參學したる人心持皆々惡敷候。此一心の明め樣は、深く工夫の上より出で可申候。

一心の置所　心をいづくにおくぞ、客の身の働に心を置けば、客の身の働に心をとられ、客の動作に心を置けば、客の動作に心をとられ、客に上手振らむと思ふ所に心を置けば、客に上手振らむと思ふ心に心を取られ、客に笑はれじと思ふところに心を置けば、笑はれじと思ふ所に心をとられ、人の構へに心を置けば、人の構へに心をとられ、我身の構へに心を置けば、我身の構へに心をとられ候也。兎角心の置所がないといへば、或る人の曰く、兎角我心を餘處へやれば、心の行所に心を取られて、客に氣をとられ候程に、我心を臍の下へ押圍ふて、餘處へやらずして、客の働によ

つて轉化せよと云ふ、尤も左もある可き事なり。然れ共佛法の向上段よりみれば、臍の下に押圍ふて心を餘所へやらぬと云は、段がひくし、向上にあらず稽古の時の位也。敬の字の位也。又孟子が放心を求よ云ふ段也。立上りたる向上の段にてはなし。敬の字の心持、放心の事は、別の書に記し進じて候。御覺へある可く候。臍の下に押圍ふて、餘處へやるまじきとすれば、やるまじきと思ふ心に心を取られて、先の用が闕けて殊の外不自由也、兎に角此心の置所がなひ也。或人問て曰く、心を臍の下に押かふて働かぬも不自由にして用が欠けば、我身の内にてどこにか、我心を置可きぞと、答へて曰く、心を右の手に置ば、心を右の手に取れて、左の用闕る也。心を左の足に置ば、左の足に心を取られて、右の

用が闕る也。心を眼に置ば眼に心を取られて、耳の用が闕くる也。どこ成とも心を一所におけば、餘の方の用は皆かくる也。或る人の曰く、然らば則ち心をどこに置ぞ、我答て曰く、どこにもなをさずどこにも置かねば、我身一ぱいに行渡りて、全體のびひろがり大心に成なり。足の指鼻耳口、毛一筋の下迄行き渡らぬ所もなく、延ひろがりて有程に、手の入時は手の用をかなへ、足の入時は足の用を叶へ、目の入時は目の用を叶へ、其の入時々々に行渡りて有樣に、其入所々々に用を叶るなり。万一もし一所に定て心を置けば、一所にとられて用は皆かくべきなり。思案すれば思案にとられ、分別すれば分別にとられる程に、思案にも分別にも渡らずして、心を總身にすぐ置き、一所にとゞまらずして、其所々

に有て用ははづさず叶ふべし。心を一所に置ば、偏に落ると云なり。偏とは一方へかたむく事をいふなり。正とは、どこへも行渡る事なり。正心とは總身へ心伸て一方へ遣はぬをいふ也。心の一所にかたつゐて、一方はかくるを偏心と申也。偏は嫌申候。萬事につき一所にかたよりたるは、偏に落るとて道に嫌申事也。どこに置かんと思ふ心なければ全體に延ひろごり、行渡りて有る物なり。心をどこにも置かずして、手前の順序に從ひて、心を其所〳〵々々にて用ふ可し。心が總身に行渡りてあらば、手の入時は手にある心を遣ふ可し。足の入時は、足に有心を遣ふ可し。一所に定めて置たらば、其置たる所より引出して使はむとする程に、そこに留まつて用が拔け申候也。心をつなぎ猫の樣に、餘所へやるまい〳〵として、我身に引とゞめておくは、我身に心をとらるゝ也。身の内にも一所にとまらずして、心を一身の内に捨て置て、餘所へは行かぬものなり。唯一所にとめぬ工夫是れ修行なり。心をはどこにもなきそといふが眼なり。肝要也。どつこにも置ぬにどつこにも有ぞ、心を外へやりたる時も心を一方に置けば、九方はかくるなり。心を一方に置かざれば、十方に有ぞ。

一本心妄心と申事の候　妄心とは、惡敷心にて候。本心と申すは、一所にとまらず全身に延びひろごりたる心にて候。妄心とは何ぞ思ひの結で一所にかたまりたる心にて候。本心が一所にかたまり集まりて。妄心と申物に成て居申候間、本心はうしなひ候。本心を失ひ候故に、所々に用かけ候。本心を失はぬ樣にするが專

也。譬ば本心は水の如くなら、一所にとまらず、妄心は氷の如くにて候。水と氷とは一つにて候へ共、氷にては手も顔も洗はれ不申候。氷をとかして水となし、いづくへも流したき樣にながして、手足をも洗ふ可し。人の心も一所にかたまり、一事に留り候得ば、かたまりて自由に遣はれず候。氷にて手足の洗はれぬ如くにて候。心を總心へ水ののびたる樣にして用ゆる所へ、やり度さまゝにやりて使申候。是れを本心と申候。

一有心の心無心の心と申事の候　有心の心と申は、則妄心と同事にて候。有心とはある心と讀む文字にて候。何事にても一方へ思ひつむる所の心には、分別思案が生ずる程に、有心の心と申候。無心の心と申は右の本心と同じ事にて候。一所にかたまり定まる事なく、分別も思案も何もなき時、心は總身に延ひろごりて、全體に行渡りたる心を、無心の心と申候。どつこにも置ぬ心なり。無心とて石や木の樣に有にてはなし、とゞまる所なき心を無心と申候。とゞまれば心に物があり、留まる所なき時は心に何にもなし、心に何もなきを無心と申候。無心無念とも申候。此無心の心に能くなりぬれば、一事にとゞまらず、一事をかく常に水のたゝへたる樣にして、此身に有て用の向ふ時出して用を叶ふるなり。一所に定まりとゞまりたる心は、自由に働かぬなり。車軸はかたよらぬによりて、自由に廻るなり。内一所につまりかたまりたらば廻るましき也。心も一所に定まれば働かぬ物なり。心の中に何ぞ思ふ事あれば、人の云ふ事をも聞ながら覺へとれぬなり。

思ふ事に留る故なり。心がその思ふ事にあるゆへ、一方へかたよる、一方へ片よれば物を聞とも聞えず、見れども見へず、是れ心に物の有故なり。物有とは、とゞまり思ふ事が心に有なり。此有ものをとりぬれば、心無心にして唯用の時斗り働きて、其用にあたる可し。此心に有ものをさらん〳〵と思ふか、又心の内に有物に成程に、是れを去らん〳〵とも思はざれば、獨り去りて自づから無心に成なり。常に去らんとすれば行かぬものなり。古歌に

思はしとおもふも物を思ふなり
おもはしとだに思はしや君

一水上打二胡蘆子一捺着即轉　胡蘆とは、ふくべの事、捺着とは、手をもつておすとなり。ふくべを水へなげておせば、ひよつと脇へ

のき、押せばひよつと退き、何として一所にとまらぬ物なり。至つたる人の心は、ちつとも物にとゞまらぬ事、水上のふくべを押が如く也。

一應無所住而生其心　此文を訓にて讀候へば、まさにとゞまる所なくして、しかもその心を生ずべしと讀申候。萬のわざをするに、せうと思ふ心が生ぜねば、手も動かぬなり。心を生じてすればそのする事に心が留まるなり。然る間留る所なくして、心を生ず可しと也。古歌に

水鳥の行もかへるも跡たへて
さすがみちをば忘れざりけり

心が生ずれば生ずる所に留まり、生ぜざれば手も行かず、ゆけば

そこにとゞまる也。唯水鳥の跡なくして往來するが如くすべし。

心を生じて其事をしながら、止まる所なきを、諸道の名人と申候。

佛法にては、此留まる心から執着の心起り、輪廻も是より起り候。

此留まる心を生死のきつなと申候。花紅葉を見ても、花紅葉とみる心は生じながら、そこに留まらぬ心を專らに候。慈圓の歌に

柴の戸ににほはん花のさもあらばあれ
ながめてけりなららめしの身や

花は無心に匂ひたるを、我は花に心をとゞめてながめけるよと、身の花に染みたる心をうらめしとなり、ながめたりとも心をとゞめずば、とがは有間敷候。見れども聞ども、一所に心をとゞめぬを、至極とする事にて候。又敬の字を主一無敵と注して、心を一

所に取定めて、餘所へ散らさず、一切のわざをするに、その業一つを司どりて、餘所へ心をやらず、後より稄て切るとも、切方へ心をやらぬを敬と云ふ。利休が點茶の折柄、長穂の鎗を突き出したるに、ちつとも心を散さなんだ抔は、こゝの所にて候。尤も肝要の事にて候。殘に主君抔の御意を承る事敬の字なり。佛法にも敬の字の心ある事にて候。一心不亂と說給ふも、敬の字の心なり。敬白の鐘を鳴らすとて、鐘を三つならし手を合せ、夫佛と唱へあげる、此敬白の心則主一無敵一心不亂と同義にて候。然とも佛法にては敬の字の心は、至極の所にてはなく候。我心をとらへて亂さぬ樣にと、習ひ入る修行稽古の位にて候。此稽古年月積りぬれば、心を何方へ放ちやりても、自由なる位へ行事にて候。右

の應無所住の文の位は、向上至極の位にて候。敬の字の心は、心の餘所へ行を引とめて、やるまいやれば亂るゝと思ふて、卒度も油斷なく心を引結て置位にて候。是は當座心を亂らさぬ一段の事なり。常に斯くの如く有ては不自由成儀なり。喩へば雀子をとらんとて、猫の繩を常に引結て置て放さぬ位にて候。我心を猫のつながれたる樣にして不自由にては、用が心のまゝに成るまじきなり。猫によつてしつけをしておゐて、繩をおつ放して、行き度所へやりて、雀子と一つに居ても、雀子を取らぬ樣にするが、應無所住而生其心の心にて候。我心を放猫の樣にして、打捨放ちて行度所へ行ても、心の留らぬ樣に心を用候。一所に定めて置ては、不自由にて働かれず候。貴殿の茶道に當てゝ申候はゝ、茶杓を持つにも茶筌を振るにも、其持つ手振る手に、心なとゝめず、一切所作をは忘れて茶を點て手前をせよ、客に心を置くな、人も空我も空、持つ手も振る手も空と心得よ、空にも心はとめられまいぞ、鎌倉の無學祖元禪師の、大唐の亂にとらへられて切らるゝ時に、無學の電光願裏截ニ春風一と云題をつくられたれば、太刀を捨て走りたるとなり。無學の心は太刀をひらりと振り上たる電光の如くに、ひかりとする間、何の心も何の念もなひぞ、打太刀にも心はなし、切人にも心はなし、切らるゝ我も心はなし、切人も空、打太刀も空、うたるゝ我も空なれば、討人も人にあらず、打太刀も太刀にあらず、うたるゝ我も我にあらず、唯稲妻のひかりとする內に、春の空ふく風を切る如くになり。一切留まらぬ心なり。

風を切たらば太刀に覺へも有まいぞ、斯樣に心を忘れきりて、萬事をする上手の位なり。手前をするに、手に水指を持ち足を運ぶ時、其手足をよくせんと思へば、其手足水指を忘れきらねば、上手とは申されず候。又手足に心が留まらば、わざは面白かるまじき也。悉皆心を捨切らずしてするしわざは、皆あしく候。

一求ニ放心一と申は孟子が申たる事にて候　はなれたる心を尋ね求て、我身へかへせと申心にて候。譬ば、犬猫鷄なとはなれて、餘所へ行は尋ね求めて、我家へ返す如くに、心は身のあるじなるを、惡き道へ行きて物にとゞまり迷ひあるくを、何とて止めかへさぬぞと云也。尤斯樣に可レ有儀なりっ然るに、又邵康節と云者は、心は要レ放と申候。はらりと替り候。から申たる心持は、心とらへ結て置ては、つながれ猫の樣にて、身が働かれぬぞ、物に心がとゝまらず染まぬ樣に、よく遣ひなして心を捨て置て、いつくへなりともおつはなせといふ儀なり。物に心がしみとゝまるにより、しまるなとまらすな、我身へ求めかへせと云は、初心稽古の位なり。蓮は泥にしまぬ物なれば、泥に有てもくるしからず、能くみがきたる水晶の玉は、泥の中に入てもしまぬ樣に、心をはなして行度所へやれ、心を引結ては不自由なり。それも初心の時はさも有可し、其分にては上段にてはなし。至極の心持は、邵康節が心は放たん事を要せよといふにて候。中峰和尚の語に、不レ覓ニ放心一と云ふの意は、邵康節が心は放たん事を要せよと云たると一つなり。はなつ心を近くに引とめ、一所に置なと申儀にて候。又

覓不二退轉一と云は、之れも中峰の言葉なり。退轉せず常にかわらぬ心を持てと云儀なり。人毎に一度二度は能き處へ行くとも、又忘れて常になる程に、よひづをしかためて、退轉せぬやうに心を持てと申候にて候。

一急水上打二毬子一念々不二停留一と事の申候　急にみなぎつて流るゝ水の上へ、手まりをなぐれば、浪に乘てぽつぽつとながるゝなり。その如く念々の一所にとゞまらぬ樣にす可しと也。

一前後際斷と申事の候　前の心を不捨、又今の心を跡へ殊すが惡敷候。前と今との際をたちきつてのけよ、今の心をあとへつながず、たちきつて退けよと云ふ心なり。是れ前後際斷と申候。際はあひだとよみ、斷はきると讀み候。前後の間をきつてはなせよと申儀なり。心をとゞめぬ儀にて候。

心こそ心迷はすこゝろなれ
こゝろに心こゝろゆるすな

正德五未十月十一日
幡龍庵にてうつし申候

一　語錄四則

一利休居士曰く、茶は喝を止むる爲なり。其上にて種々の事をなし茶の湯と名づく。去れども之れ我本意の茶の湯と見る可し。故に茶器其外手前等何事にても、其宜しき樣にし、宜しからざるを嫌ふ。見事と能きといふとあり、見事とは能きには劣りたるものな

り。畢竟音も無く香もなき所なり。此心を元として茶の湯を始め、茶を點て道具をも用ゐ候時は五常なり。五常も時によりて理に背くとあり。其背くを理と見ると能く〳〵工夫ある可きとなり。上より下萬民に至るまで不用と謂ふとなし。茶の湯の樂み擧て謂ふ可からず。至れる哉云々

一末世の人、修行なくては成就し難き趣意は、先づ佛法に於ても、上根上智の時代は、佛拈華微笑或は捧下にして悟り、或は言下にして大悟し、經を聽て了し、達摩大師の不立文字其規矩なし。段々其後に至て、益々規矩法度を以て修業あると、或は座禪觀法參學問答誦經念佛等なり。是皆高きに登るの足代なり。悟る上には此道具不用なり、茶道も亦復斯の如し、珠光紹鷗祖先居士の如來法、下根の人何を以て登るべきや。先づ一心確かにして、修行の足代に登らずんば有る可らず。依て教諭の爲めに、傳來家記の箇條の中を少し書き拔て拙舌に換ふるのみ。

一心中には悟道を定め、外には茶の湯の業を顯はし、內には智仁の法を定め、外には禮儀を顯はし、內には神の信を納め、外には衆生の信を顯はす、一句了然として意趣百臆を越え、一所透脫すれば千所萬所一時に透る、機輪轉變大自由を得む、其汎きと計る可からず。且らく道は心氣と事と合體なして行はる、之れ中道の眞なり、心に異ひ口に違ふ時は中道にあらず、事は盡くるとも心氣は盡く可からず。譬ば幼童も說かは說く可し、又老翁も行ひ難し。

一茶の湯は平生の事なり、道心禮儀第一なり。火は能く湯の沸くを

専一とし、掛物は古則偈頌を見て己が道に進む事を思ひ、花は生けたるまゝを入れて、清き天然自然の花の清きを心に移して己れを樂しむ、點前は事を能く用ひ、働き拍子も無く、唯生れながらの體にして己れを樂しむ。かりにも人と我れとを離るゝとなかれ、我と人と兩た身に在ては茶道にあらず。現に茶は人の呑みかけを呑て禮とする意なるは、賓となり主となり、主客とも一致に正直なるを以て進むを願ひ、衆生一所六根清淨にして、本法世間相常住して樂しむが誠の茶なり。

一　南坊錄拔粹

南坊錄中に於て。苟くも茶と佛敎。即ち茶禪に干するものを茲に摘拔すれば

○宗易ある時集雲庵にて茶湯物語ありしに茶の湯は臺子を根元とする事なれとも心の至る所は草の小座敷にしくことなしと常々のたまふはいか樣の子細にて候と申に宗易の云小座敷茶の湯は第一佛法を以て修行得道することなり家居の結構食事の珍味を樂とするは俗世のことなり家は漏らぬほど食事は飢ぬほどにしたる事なり是佛の敎茶の湯の本意なり水を運び薪をとり湯をわかし茶をたてゝ佛に供へ人に施し吾ものむ花を立て香をたく皆々佛祖の行ひの跡を學ふなり猶委は己僧の明めにあるへしとの給ふ

○宗易へ茶に參れは必手水鉢の水を自分手桶にて運ひ入て向ひ附けられ候程に子細をとへは易の云露地にて亭主の初の所作に水を

運ひ客も初の所作に手水をつかふ是露地草庵の大本なり此露地に
むかひ向はるゝ人互に世塵のけがれをすゝく爲の手水鉢也寒中に
は其寒をいとはす汲はこひ暑氣には清涼を催しともに皆奔走の一
なりいつ入たりともしれぬ水心よからず客の目の前にていかにも
いさぎよく入てよし云々

○或人爐風爐夏冬茶湯の心持極意承たさと宗易に問ふ易答に夏は
いかにも涼しき樣冬はいかにも暖かなる樣に炭は湯のわく樣に茶
は服の能樣にこれにて秘事は濟み候よし申されしに問人不興にし
て夫は誰れも合點の前にて候と云けれは又易の云さあらは右の心
に叶ふ樣にして御覽ぜよ宗易客に參り御弟子になるべくと申され
ける同座に笑嶺和尚ありしか宗易の申され樣至極せりかの諸惡莫
作諸善奉行と鳥窠のこたへられたる同然との玉ひし也云々

○前畧　掛物程第一之道具はなし客亭主ともに茶湯三昧の一心得道
の物なり墨跡を第一とす其文句の心をうやまひ筆者道人祖師の德
を賞翫するなり俗筆の物はかくる事なさなりされども歌人の道歌
なと書たるを掛くる事有四疊半にもなりては又一向の草庵とは心
持違ふよく〳〵分別すへし佛語祖語と筆者の德と兼用るを第一と
し重寶の一軸なり又筆者は大德にはあらねとも佛語祖語を用てか
くるを第二とす繪と筆者によりて掛るなり唐僧の繪に佛祖の像人
形多し人により持佛堂の樣なりとて掛ぬ人有一向の事也一段賞翫
して掛くへし歸依あるべき事別てなりと易の給ふ

○飯臺は机のことくして二人三人四人も臺一にて食する於禪林日用

の作法也然るを紹鷗宗易大徳寺南宗寺衆を茶の時折々飯臺を出されし也一疊臺目抔はあまりにせまき故出し入なりかたし二疊三疊別て四疊半に吉茶立口の外に今一つ口ある座席ならでは茶立口よりは出し入不好事なり亭主先つ臺を席へ抱へ出しふきんにて清めさて食の椀にもつその飯を入れ蓋をし下に汁の椀をかさね如此客の數次第引盆に並へ運ひ出て臺の上にあけ汁は汁次にて出す菜も鍋にても鉢にても出す其品次第の見合せ酒は三返にてすむべし食椀の蓋にしたる物にて呑むなり客の喰ひ樣別て奇麗に喰へし總て飯臺の料理は殊更かろくする事なり汁一つ菜一つ強て二つ茶うけの物抔も出さすもよし又一樣は食椀汁椀蓋此三つを銘々青染の木綿ふくさにつゝみ出しもつそは鉢に入てはこひ出し亭主銘々客へ配る客も椀を出してうくる仕樣もあり勿論飯臺は魚肉料理の時の事にてはなし云々

○野掛狩場抔にて茶會を催すこと有易大善寺山にて御茶上られしには愚僧も供して勝手を仕しゆへよく〳〵所作を見申也宗易のたまふは野かけ抔は定りたる法なければ根元の格は一々備ずしてはなりかたし第一景氣にうはばれて茶會しまぬ物なり別て客のこゝろもとまる樣にする本意なり夫故道具も別て秘藏の茶入抔よし大善寺山にては尻ふくら茶箱に仕込れしなりよく〳〵勘辨すべし箸物抔はすゝぎてさはやかにするを第一とす興を催し過候得ば雜席の樣になりうと〳〵しけれは景氣にうばはれる也よく〳〵功者の所作ならてなりかたし

○野かけは就中其土地のいさぎよき所にてすべし大方松陰河邊芝野抔しかゝべし主客の心も清淨潔白を第一とす然ば此時斗清淨にするにあらず茶一道本より得道の所濁りなく出離の人にあらずんばなりかたかるへし未熟の人の野かけふすべ茶湯は眞似をするまでの事なり手藝諸具ともに定法なし定法なきか故に定法大法有其子細は只々一心得道の所行形の外の業なる故なましいの茶人かまへてあやまる事無用なり天然と取行へき時を知へし紹鷗佗茶湯の心は新古今集の中定家朝臣の歌に

みわたせは花も紅葉もなかりけり
浦の苫屋のあきのゆふくれ

此歌の心にてこそあれと被申しとなり花紅葉は則ち書院臺子の結構に喩たり其花紅葉をつく〳〵と詠來りて是れは無一物の境界浦の苫屋なり花紅葉をしらぬ人の始より苫にはすまれぬなり詠じてこそ苫やの澁すましたる所は見たてたれ是茶の本心なりと云はれし又宗易今一首見出たり迚常に二首書付信ぜられしなり同集に家證の歌に

はなをのみ待らむ人に山さとの
雪間の草の春を見せはや

是又相かまへて得心すへし世上の人にそこの山かしこの春の花かいつ〳〵咲へきかと明暮外に求めてかの花紅葉も我心にある事を不ㇾ知只目に見ゆる色斗を樂也山里は浦の苫屋も同前の澁住居也去年ことしの花も紅葉も其雪の埋つくして何もなき山里になりて

只澁すましたまでは浦の筥屋同意なり扨又彼無一物の所より自ら感を催す樣なる所作か天然と端々にあるは埋つくしたる雪の春になりて陽氣をむかへ雪間の所〳〵にいかにも春やかなる草がほつ〳〵と二葉三葉もえ出たごとく力を加へずに眞なる所の有道理を取れしなり歌道の心は子細もあるべけれども此兩首は紹鷗利休の茶道にとり用らるゝ心入を聞覺てしるしをくなり箇樣に道に心さしふかくさま〳〵の上にて得道ありし事の愚僧等か及ぶべきにあらず誠に尊くありがたき道人茶道かとおもへば則祖師佛の悟道也殊勝〳〵〳〵

○易の云濃茶の手前に一段と草あり薄茶の手前に極眞あり此差別能々心得すべし時により所によると也輕さやうにて秘事也と云々

臺子陰陽のかねを以て百千萬の飾草茨きの佗座敷まで此法にもるゝとなき事の子細は多年修行の處なりさて又佗の本意は清淨無垢の佛世界を表して此露地草庵に至ては塵芥を拂却し主客ともに眞心の交なれば規矩寸尺式法等あながちに云へからず火を起し湯を湧し茶を喫するまでのとなり他事ある可からず是即佛心の露出する所なり作法挨拶に抱るゆへ種々の世間の義に墮して或は客は主のあやまちを伺ひ譏り主は客のあやまちを嘲る類になり又此子細を熟得了悟する人を待に時なし趙洲を亭主にし祖大師を客にして休居士と此坊か露地の塵を拾ふ程なれば一會は調へきか大笑〳〵〳〵斯云ても天下の人を達磨にも道洲にもなしかたしなさまほしく思ふも又一著ありよし〳〵〳〵三界出離の人は却て三界に安座すと

云へり爰に於て迷惑朦朧たり休居士の得心いかゝと一問申したれば休の云其祖師佛の大悟に於ては愚盲の宗易何としてか御坊に及ぶべき但御坊は佛教經論に依て却て迷を生するものか易は茶のとにて申へし臺子を始め諸事の法度は百千萬なり古人も爰に止て是を茶湯と心得られたると見えたり各法度を大切にすることのみ秘書に記しおかれたり易は其法式を階子にして今少し高き所にも登り度志有て大德寺南宗寺なとの和尚達に一門問取し旦夕禪林の清規を本とし彼書院結構の式よりかねをやつし露地の一境淨土世界を打開き一宇草庵二疊敷に佗すまして薪水のために修行し一盌の茶に眞味あるとをやう〳〵ほのかに覺候へども時々水の濁りをなすとは易か誤所也又客たる人得道なき故主も又ひかれて迷とありさればこそ例の三和尚たち御坊など入來のとき易か誤は凡有まじきに只恐るゝ所は數寄の人世に多くなるほど師匠も多く口々に指南し或は大名高家の交には草庵を書院の如く取捌き其本意を尋るに及ばず或は大食大酒の人は草庵にても酒盛の興をなし其心に叶はざれば佗數寄いやに思ふ也世を渡る師匠どもは大名の氣に入茶會に長ずるを專らと心得銀持分限者此と好むを幸とし て欲心より進る茶湯なれば只今さへ思外なる振廻多しましてや末代の茶思ひやられて是非に及ばず百年の後再ひ生れて世間の茶の成果たる有さま見申度と也と云々

予か云されば又いかやうに指南仕てか道の正しく立行とは候へさと云易云さま〳〵思案してもあきらめかたき所なりせめては書

院臺子の法を習べきと云人に不知と云て不敎草庵のことばかり安〻と傳授してかねなとをいはず大方を疊の目數に覺させ炭續次第より濃茶只一通りにして佗の心を何とそ思入て修行するやうにさへ仕立たらば其内十人二十人に一人も道にさとき人は道に入べきか道に入る程の人にならば其時望み次第臺子をも得心させて立返りて品々の規矩を修行せば一日二日にも事濟べし然ども此思案もとげがたき子細あり能相の傳授の末々珠光紹鷗の弟子熟不熟いか程もあり此頃所々に蜂起してさま〻筋も知れぬ飾置合をして人に珍らしからし夫を美目にし誰は此飾をして客をしたるに其客は何某の弟子なるか夫を不知して赤面しつる何某の弟子は能知て首尾したりなど云程こそあれ師を取替て出入を絶する類多し夫

ゆゑ師も思ひ思ひさま〻のことをたくみ出し古傳に違ひたるといくつと云數を不知十年を不過茶の本道捨る可しすたると雖も世間には却て茶湯繁昌と思へき也世俗の遊とに成てあさましき成果今見るが如し悲哉宗易和漢ともに古來無之露地草庵一風の茶を工夫し恐らく趙洲の意味にも可叶かと思ふに未世相應せず程もなく正道斷絶すべきこと口惜しきと也二疊しきも頓て二十疊しきの茶室になる可し易は三疊敷をしつらひたるさへ道のさまぬけかと後悔なりとにかく加樣に思ふも茶道の執着なり佛祖聖賢の大道さへ時有て榮へ衰ふ聊悲む可からす末世出現の佛もなきに非ず此道に於ても得心の人後代に出來し御坊や休か志を感通することもある可しさやうの人に一服の茶を手向られたりと百年の後にたり

とも骸骨潤ち得て亡魂などか受悅ばざる可き必茶道の守神となる可し佛祖もなとか力を添玉はさらんとねんころに物語ありつる其日は天正十七年二月二十八日其夜小雨しめやかに降夜たけなはに及たる既に過し十九年辛卯同月同日横難に逢玉ふ悲歎無限此坊か回向日々〳〵の茶湯ならでは深切の人も有まし此坊が無き跡もおこたりなく回向申可きよし鑑板に殘置なり云々

○住吉屋宗無は古風眞乎なる茶人にて喩ば此茶入には此茶盌此水指と日頃夫々吟味して定め置合なども常住一樣にせられし故未熟の輩の見所すくなく無興のやうに人々思けれども其日其夜の節に應し思入あるとをせられしなり專ら夜會を好て年々熟しける故夜會一入殊勝に働かれし也禪學に志深かりし故氣味面白きと多し人により茶湯しめり過たりといへり休は一段譽られ今少しはたらか せ度はあれども働き過たる誤よりはその遙かに增なりと何れより も賞せられたり

○宗易居士は理に通し業に叶ひ大悟の茶人なりさるゆへに四季折々晝夜共に自由自在なりしなり其本を明らめ其末をわきまへひたすら茶の正道世に傳んとを根本に深く志玉ふは我か誤をも隱す心なり人々にもわざ〳〵語り聞せ我に勝れる能とあればいかなる初心の人の所作をも感嘆して自他の無差別道に於て只深切なりし故交る人何れも睦しからぬは無かりし也

○玄關口に關守とて壺を置と小座しきに玄關付ての後利休例の和尙達を御茶申されしとき壺又は香爐など關にする一問せられたる趣

向なり一關透過の義なり戸の内に問語を書つけて出さるゝ假令ば一壺當レ關不ニ敢轉一和尚大慈示ニ透脫一などありしなり客着座して主出られたるとき答句あり今は何の子細も知らぬ人々關守をする當惑させ笑語のたよりと云へる沙汰のかきり也

○露地の雪隱は三位の一と云禪林にも百丈和尚の清矩にこま〳〵と記たり數寄屋の桂窓の子などはいかにも麁相なるがよし雪隱はすきやよりわびにても柱などいかにも古きものを不用さはやかにすべし亭主馳走には珍客には必雪隱作りかへ新きとあり又わびにても戸など改めかへかべぬりなをすもありその觸杖竹ばし箒なども改るなり其馳走を心付て見る第一なり會のとき雪隱の内を見るとも禪林に便處の役を淨頭とて歴々の道人和尚のせられたる例多し修行の心持第一なり云々

休の露地せついんの内砂をたてをかるゝと他人とは違たり客ありてかへると其まゝすなを取のけ掃除しをきさて又客來前とくと水を打掃除仕廻て其後かわきを砂を手桶に取よせ山形に立其上に觸杖をさゝれたり夫故常に不圖見廻て雪隱を見るに砂なし不時其儘露地入したるとき初に砂なり中立前に砂入てあるともありし也休の云路次小路の清めにもかはき砂を盛立つるものなりさればこそ御幸御成の路筋辻などにもかはき砂勿論の古例也これは俄に小路いかやうの不淨あるべきもはかりがたし又は俄の雨に水たまり出來るともありさやうの時そのまゝ清めけす爲めなり根本のほこりを取清淨をいたす心得也さて雪隱の内は露地のは小用所にて不

淨あながちある可きにあらねども先は便所なるゆへ其用を便した
る時かはきすなふみて不淨をいけゝすためにたてをく砂なり觸杖
も其用意なりしかれが客のたびゝにかわき砂を改めて立る筈の
となり常住いつよりたてたるとも不知たてつめにするは砂たてゝ
置たる詮あるまじかやうのところそいかほどのわびにてもせいを出
して心つかひあるべけれさて又すなを水うち置く人ありこれ尙不
知人のするとなり昔より不淨をきよむる儲けにするは雪隱には限
らずかわきすななど云へは水を打つものにてはなしそれゆへ雪隱
の内よくゝ掃除し水にてなかし夏冬ともにあらひ清めて掃除仕
廻たるとき砂を取まぜて立つるなり

○茶を點つるに茶碗を茶巾にてふきて後もみ合て茶入茶杓を取て點

つるとあるとき笑嶺和尙利休に御尋ありければ右のことくせらる
ゝといかやうの心得にてやと御尋也休の答に茶巾しめりたるもの
とりあつかひたる手なればしめりをかわかす爲めにつかまつると
心得候由こたへられければ和尙いかにもさもある可し但客になり
て茶入をとこいて見る時ももみ手にて取あつかわるゝほどにする
人の人々によくゝ尋候へ共只今休のいへるほどのこたへもなし
さりながら僧侶の修行にあるとにて我等よくしりたることなる間
相傳申すべし修行の山こもりなとし難行する人高き山嶺つたいな
どに柴をとり薪を運ぶ時佛を念し禮拜などするは常のつとめなれ
ばいかなる所にても其時刻に及ば先薪をもをろし置て禮拜恭敬す
るなり水あれば手口をすゝぎ水なき所にては柴などにて手を清心

の清淨を拜むと也それを本としてつねにも六時不斷拜がならずたびごとに手水せずとも手をもみ合せてあらたむるを柴手水と云也眞言宗抔は猶更常に幾度もする也これをもつて考ふれば大事の道具抔取あつかひことに一大事の茶に取かゝるときは手水無餘儀事と覺候由被仰休も始めて此事を根元承り不斜忝き由被申し物毎根本を知る可きと也不知してするとはづかしきと也云々

○九條殿にて和歌の御物語に

思はしと思ふも物を思ふなり

思はしとだに思はしや君

と云ふ歌を吟せられしを休居士幷愚僧も御席につらなりはべりて承りしなり彼かねをわすれ事を忘れたりと思ふ内はわすれがたくいつのことにか天然とわするゝとき至る先一度いさゝかの業少しのかね合をも忘れねやうに打なし一遍に修行しもてゆきぬれば終に忘るゝ境に入るとかく始より構へを忘るゝ事にはあらず

○前略草庵の茶の湯は臺子本式書院の格式を本とするとはいへども陰陽ともに用る子細あり書院臺子にも陰陽ともに用る子細に本づきての事なり其子細會得せざればかならず相違する事なりねんごろに根本を極めぬればいかやうにも自由なる事と譬ば眞の文字を知て行草に到ればいかほど自由にくづしやつしても本性たがはず草かなばかり習ては筆畫たがひ本性を失ふ事多し第一眞字鍛煉あるべきなりされども人々に依て執行かはるべし古人草字の妙を得行字の妙を得かな文字の妙を得たるあり草行かなも妙處を得る程

の人はたとひ不得手にても眞字の本性を辨へる程にはある事なり眞より入行より入草より入る其入る所はかわれども奥儀は同一なり其入所は人々の性質に隨ふべきなり或は老人世の人かならず眞よりとのみ心得書院亭子の事業一々手熟し鍛煉し畢て後草庵を執行す可しとひたすらに取掛りては一生草庵の風味に至る事なし師たる人能々了簡可有事なり佛の衆生を度し玉ふごとく大乘の機小乘の機に應じて頓と漸との引導あるごとく諸具のあしらいなどくわしく知らんとするゆへ却て物に依てひが事をするなり只草庵露地の主にても客にても始終の大法を一通習ひ覺え道具も一具二具を極め我所持のしかるべき道具師に相談して組合せ置方かね合取扱一通りを覺る事は老人世務の人もなる事なり其上に本心の會得を深切にすれば終行のはかゆきて間もなく茶になる也此終行書院方とはかわる分別あるべし返〳〵茶湯の深味は草庵にあり眞の書院亭子は格式法儀の嚴重を調へ世間法なり草の小座敷露地の一風は本式のかねを本とするといへども終にかねをはなれわざを忘れ心味の無味に歸する出世間法なり斯いへばとて壯年又はいとまある茶人心味だてをして知るべき事を知らず取扱ふことふつゝかにては不相應の事なるべし實は事と理と別々にあらず事熟すれば心熟し心熟すれば業熟す業は能すれども心はまた到らずといふは業もいまだ妙處にいたらざる故なり心は熟したれども業いまだ至らずといふも心いまだ妙に入ざる故なり是佛の道にもふかく了會の一段なりと云々

一休居士老後に十一のかね陰陽差別なく置合せ玉ふこれほど不審なるとなし度々尋申けれども年老て物忘れなりとのみの玉ふかの去々年の正月五日のとなり閑に我れ獨客にて茶を給りし時此事を申出したれば機嫌能くさらば此物語り申べしかまへて他言あるべからず世間の衆に聞かせては法の亂るゝこと也茶一道の傳のまゝさしをきたるがよし笑嶺和尚あるとき閑なる夜話の次でに和尚仰られけるは休居士の茶味中々古來茶人の見解にあらず禪法の眞味と他事なし我らも茶を飲むとすきなるゆへ度々茶會に遇ふて功者に成て色々のことを耳にふれ候それに付不審して心得承たり被仰候何事にてか候と申ければ陰陽のかね晝夜の差別吉凶の飾とやらん度々承るとにて候が書院臺子の飾などは勿論なさくては叶はぬと覺へ候草庵の一風は居士專ら取たてられ禪林の新規引合せ〳〵露地數奇屋賓主の次第諸具萬般詳かに埒明さ候これ迄にても濟べく候へ共今一重の關をこへられたらば廣くやすく成玉ふべしと三祖大師の信心銘を始より終まで懇に讀聞かせ玉ふこれは御坊の御存の書却て休の物語に不レ及とかく揀擇する心增愛の心二邊に成ては不二心信信心不二の處會得すべからずさて和尚の玉ふは賓主も陰陽なり水火も陰陽なりこれらはいかゞ去りさらひ給ふや所謂唯須息レ見。不レ往二一見。慎勿二追尋一。纔有二是非一。紛然失レ心。由レ一有レ一。亦莫レ守レ一心不レ生万法無咎。卜陰陽未動前は只一なりこの一も亦守らざれば即陰陽に於て自在なり草庵の規矩に於て陰陽去さらひなさ筈なるへきかこれ相應の働ならん露地の茶と打出

してとり行はるゝ程ならば万一世間知辨の人來て一問したるとき答話おぼつかなくとこそ示されしに感心不斜多年の關門一言に通達しられしさかぎりなく是老後の一大安樂にて御座候と禮拜申けるそれより百千万の本式を心の一つかねにさとりおさめてつらつら明め見れば陰陽は天地の二氣日月のこどく晝夜の如くされば善惡吉凶の沙汰に不及陰陽を合て十一のかね心次第に用てこそ小座敷の一風なるべけれ數年の間このかねにくびられ心外の至なり眞臺子草の座敷こゝにて明かなり歡喜あるべし草庵の一風に於ては鷗の得心も成就せず漸々に此休が心に悟りあきらめて思ふやうにせよ鷗なき世なりとも一體同心の子弟いさゝか疑ふと勿れと幾度も〳〵申されしなり和尚の示教にて大悟の茶に至ると生々世々本望不レ過レ是御坊に見出さるゝとこれにかぎらずさらば御坊と休ばかり如レ此仕るべし他人にさするとにてはあるべからず其心得至りたる人は各別なれども今の世に思ひもよらずと語り玉ふ此坊信心銘にては讀覺えたれども鈍痴のかなしさ今日迄思ひよらず此物語を聞て誠洞然明白とはこのときなるべしとよろこび申ける其後かならず堺へ下り候へば萬法無咎の一服可仕と約束申けるに其二月不慮ゆえ其後は一服を參せざると無念至極也

右同時在京同月八日夜會に休の玉ふは我も七十に滿る齡なれば堅固也とて頼がたし子供もいまだ茶道未熟なり今より二十年もつとめたらば器用次第茶にもなるべし其中此一大事相傳をいづれの子供なりとも傳へ玉へとて印可の一卷取出し傳授し玉ふ我とも辭退

申べけれども世間むきにていかゞとしいて披見に及びまことに茶の一道大切の所とこそ云ふべからず

○山水草木草庵諸具賓客庵主歴然として前に有しりへにあり其規矩陰陽の五六小かねの七つ一尺四寸一尺八寸五分と云一句に在て千變万化自由自在也五十六十のかざり所作は只此枝葉の至なり本規に至べきとの階子なり又大秘事と云はかの山水草庵主客道具法則規矩ともに只一ケに打擲し去て一物の念なく無事安心一様の白露地利休宗易大居士的傳の大道と知べし云々

一　利休の一枚起請

唐土我朝にもろ〳〵の智者達の沙汰し申さるゝ觀念の茶の湯にもあらず、又學問して會の心をさとしのむ茶の湯にもあらず只のどの渇をやめむ爲には湯だに沸ぬれば必やむぞとおもひとりてのむ外に別の子細は候はず但し數奇といふ事は我胸さへ奇麗に候へばよろづ其中にこもり候也此外に興ず可き事を存ぜば二人の隣にはづれ數奇者とはいはれまじ此道を信ぜん人はたとひ和漢の學得たりといふも一文の愚鈍の身になりて尼入道の無智の輩に同じくして數奇の振舞をせず只々一向に湯をわかすべし

茶の湯とはたゞ湯をわかし茶をたてゝ

のむばかりなるもとをしるべし

一　小堀遠洲公書捨文

夫れ茶の湯の道とても外にはなく君父に忠孝をつくし家々の業懈怠なく殊には舊友の交をうしなふ事なかれ春は霞夏は青葉がくれのほゝとぎす秋はいとゞさびしさまさる夕の空冬は雪のあかつきいづれも茶の湯の風情ぞかし道具とても珍らしきによる可からず名物とてかわりたる事なし古きとて其むかし新らしたゞ家に久しく傳はりたる道具こそ名物なれ古きとてかたちいやしきを用ひず新らしきとてかたちよろしきは捨つべからず數多きとをうらやまず少なきをいとはず一品の道具なり共幾度ももてはやしてこそ末〳〵子孫迄も傳はる道もある可し一飯を進むとも心ざしあつく多味なりとも主たるものゝこゝろざしうすき時は早瀨の鮎みな底の鯉とても味ひある可からず籠の露山路のつたかずら明暮れ來ぬ人をまつの葉風の釜のにへ音たゆるとなかれ

一　澤庵和尚壁書

飯は何のために喰ふものぞ、ひだるきを止む爲にくうものか、ひだるきとなくば喰ふていらざるものよ、然るに添物なくては飯はくわぬと皆人の云ふも辟言なる可し只偏に空腹を止む爲めの謀なり役に喰ふ食にあらず、そへ物なくてはくはれぬはいまだ飢の來らざるなり、うえ來らずば一生喰はであらん、若し飢來らば其時において糟糠を撰ぶ可からず、況んや飯に於てをや、何の添物かいらん、受レ食如ニ服藥一せよと佛も遺敎たまゐし。

一　光廣卿御壁書

萬のとさわらずかゝわらずわずらひなき身となり春秋の花もみじをともなひ己がまゝに杯をかたむけ世をうしとも樂しとも思はず靜かに座をしむる折からは一枝の花を生け一炷の香をくゆらせよき茶抔のみ古さ文を友としてもし心あらむ人の訪ひ來る事もあらば古へ今の道のかたはしをもかたりなぐさむこそこよなふみとけからまじかゝる業をなさん事は山林の中に住でなどいへど山の奥はやしの中とても名利の心はなれずばいかでやすかる可き只市の中にすむともあながち所をえらびかたちを改む可きにあらず僧は僧のまゝ俗は俗のまゝ柳はみどり花はくれなゐ

まどはぬもまどふもおなじみなもとの
こゝろを見ればたゞありのまゝ

一　夢庵戯歌集の一節（大我和尚孤立道人と號す）

眼をむき出す達磨も臂を打きりし惠可も柳はみどり花はくれなゐ瓜は甘く瓠は苦し迦葉の顔を破るも阿難の竿を倒すも乾屎橛を佛陀と悟て拭瘡紙を貝葉と敬ひ主人公を呼て莫妄想と嘖りつゝ五蘊の浮雲むなしく去來し三毒の水泡いたづらに出沒するごとに南無佛〳〵と申す可しこれを悟了即童といふ此外に作畧を存せば佛祖の禪にたがい魔魅の業になる聞て釋迦に心經ながら槃犢が口號をかいて拈華にかへ微笑に備ふるのみ

一瓜は甘く瓠は苦く釋迦達磨おなつ精十郎も同じあんばい

一繪にかきし餅の看板見るからにおもひついてもくはねばひだるし

一煩惱の皮が其まゝ菩提あん饅頭くへばあまいだ阿佛

一お釋迦でも達磨でも見よ本の色柳はみどり花はくれなゐ

濃茶を振舞はれて後の朝よみてつかはしける

一口とりの菓子もすきやの茶ばなしにたちわすれてぞにぎりさがりぬ

別儀といふ茶をたまはりけるかへし

一阿彌陀佛となふる外に別儀なさおしえちや耳をふりたてゝさけ

一　無難禪師法語の中道歌　（至道庵と云）

一心より外に入る可き山もなし
　しらぬ所をかくれ家にして

一世の中を思ひはなれて聞時は
　入相の鐘も濱の松風

一ねても夢おきても夢の世の中を
　夢としらねば夢は覺けり

一世の中はふくべの尻になまずの尾
　おすが如くにねたるべうなり

大道を問ふ人に

一天地の外までみつる身なれども
あめにもぬれず日にもてられず
大道の元を問ふ人に

一おもはねば思はぬものもなかりけり
思へば思ふもとゝなりけり
大道を聞き得て行きぬ人に

一とく法に心の花はひらけども
その身はなれる人はまれなり
法を説く法師に

一ころせ〳〵我身をころせ殺しはてゝ
何もなき時人の師となれ

迷ひふかき人に

一己が身にばかさるゝをば知らずして
狐狸をおそれぬるかな
ある法師

一悟りても身より心をしばり繩
とけざる内は凡夫なりけり
大法のかたきを

一世の中の人のかたきは外になし
おもふ我が身はわかゝたきなり
物をくるしむ人に

一何事も修行と思ひする人は

身のくるしみは消へはつるなり

庭前柏樹子

一草も木も國土もおなじ法の道
げに有り難きおしへなりけり

麻三斤

一佛はと問へは答ふる麻三斤
なにか佛の名にもれぬべき

諸行無常是生滅法生滅々己寂滅爲樂

一いきながら死人となりてなりはて丶
思ひのまゝにするわざそよき

右に抄出したる十五首の道歌茶道を讀みたるにあらねと自然茶道觀

念のはしともなるべきか所謂茶禪一味能く〳〵味ひしるべきものなり松風を聽茶杓をとるもの必ゆるかせに思ふべからず　（古今茶話）

一　大心和尚の記

一趙茶眞一味

趙洲從念禪師。問二新到一。曾到二此間一麽。曰。曾到。師曰。喫茶去。又問レ僧。僧曰。不二曾到一。師曰。喫茶去。後院主問曰。爲二甚麽一曾到也。云喫茶去。不二曾到一也。云喫茶去。これを以て趙洲の茶と云ふて禪修行の據とするなり省文にて趙茶とは申すなり　趙洲は洲名なり和尚の號にてはなきぞ此時代は今のやうに道號別稱などなし趙洲に居られたる故に人より尊敬して名を云は

ずに居所をいふなり後代には尙更の事

一無味茶

碧巖三十則評。可レ謂無味之談。塞ニ斷人口一。凡そ禪法は總て味のなきやうに示すなり茶道は則ち禪規なるが故に無味を示して眞味を知らしむ是れを無味茶といふ可し

一　珠光古市播磨法印への相傳の略

此道第一のわるきとする事は心の我慢我情なり。功者をそねみ初心の者を見下す事第一段無ニ勿躰一事共なり。功者には近附きて一言をもきゝ又初心をば如何にもそだつる可きことなり。又當時ひつかるゝと申し初心の人體が備前信樂物を持てる人をゆるさぬとたけくらむと言語同斷なり。一向叶はぬ人體道具にからかうべからず。如何樣のてとり風情にてもなげく所なく肝要にて候。只我慢我情が惡敷事にて候。又我慢なくてもならぬ道なり。諸道に曰く心の師とはなれ心を師とせざれと古人も云はれしなりと。

編者曰此文寫字の誤か意味不通の所あれ共他に參照す可き策もなければ原字のまゝを揭ぐ

一　茶話抄附錄　（如心齋傳法）

此一卷一覽の處凡茶道の奥儀一二句にて盡せり予聞傳習ひ得たる事猶又書添申可く候へ共其數多し畢竟言葉の替て其意同じきは無益の事なり法は秘といへども皆常の事なり古松談ニ般若一幽鳥弄ニ眞如一

風に葉の動くまでも皆之れ法をあらはす依て隱くすに所なく予が得たる所の秘事一兩句書添申候

或る人茶道の奥儀を問ふ答へて

茶の湯とはいかなるとをいふやらむ

墨繪にかきし松風の聲

一軍法には守破離とあり是れ茶道の極意

守は下手

尤も常體の下手とは違ひ候事業をして工夫につながれたる物

なり守レ狩待レ兎

破は上手

尤も常の破とは違ひ守て破るなり時によつて守るも法を破るも

法なり見レ風使レ帆

離は名人

尤も常の離れたるとは違ひ事を盡し離れて守る應無所住而生二

其心一

一金剛經應下無レ所レ住而生上二其心一。事終る者是工夫肝要也

夫れ茶道は在レ心不レ在レ術。在レ術不レ在レ心。心術雙忘。一味常顯。是茶道之妙用也。

一壺中爐談（實山師）

器は器也天地は第一の大器にしてしかも上下陰陽日月晝夜の歌あり數奇の數奇たるに渉らざる所なし人々其器に於て欲を生ず專らつゝ

しむ可き事なり其分を安じ一簞一瓢の足るとを知り身の外の願をなす可からず少欲知足の本意を了悟せざる故に一を得ば二をねがひ三つが五つに成るとを覺えずしらず他の寶をかぞへうらやみさたなくあやしき心に成もて行と目前に其類多し云々

一　和漢故事談

一路居士は一休と同時の人なり或る時一休和尚一路に向て云萬法路有り如何なるか是一路々々答へて云萬事休す可し如何なるか是一休と一路詩をよくし五山の僧と贈答多し和歌も詠ぜり佗茶を以て名あり手取釜の歌にて名あり

身をかくす庵の軒の朽ちぬれば
生ても苔の下にこそすめ
手とりめよ己は口がさしでたぞ
雑煮たくと人にかたるな

編者曰右手取釜は一路居士なりとも粟田口善法なりとも又ノ貫なりとも傳ふ蓋し各時代を異にす其何れが眞なるを尋究するに由なし

一　一問故實

小座敷に玄關附けて後利休例の和尚達へ御茶被ㇾ申し時一問せられしより發れり利休今日始開ㇾ小玄關一勞ニ煩老和尚笑嶺和尚一透ニ脫雲關一活路通到頭勘辨老趙洲

又壺香爐等を關にすへ一問をかける趣向あり一關透過の義なり戸の内に問語を書付て出さる譬へば一壺當レ關不二敢轉一和尚大慈示二透脱一抔有りしとかや客着して主出たる時答句あり今は何の子細も知らぬ人關守さへ當惑させ笑話のたよりとする沙汰の限なり

編者曰當世關守とて露地の飛石に小石を据へると何の意味もあらず只廣き露地の道しるべにすへる迄なり即ち關守のある路は通過す可からずとの意なり

一　露地清茶規約

一賓客腰掛に來り同道人相揃はゞ板をうつて案内を報ず可し

一手水の事專ら心頭をすゝぐを以て此道の肝要とす

一庵主出請じて客庵に入可し庵主貧にして茶飯の諸具不偶美味も又なし露地の樹石天然の趣其心を得ざる輩は是より速かに歸りされ

一沸湯松風に及び鐘聲到らは客再び來れ湯合火相の差ひとなる事多罪々々

一庵内庵外に於て世事の雜話古來禁レ之

一賓主歴然の會巧言令色を入べからず

一一會始終二時に過ぐ可からず但法話清談に時うつるは制之外也

南坊　在判

宗易　在判

天正十二年九月上三

右七ケ條は茶會の大法なり嗜レ茶輩不レ可レ忽レ之者也

一　吸江の齋號

千宗左吸江齋の號は大德寺寅賓和尚の撰なり

馬祖大師一日龐居士問曰不二與萬法一爲レ侶者是甚麼人大師曰待三汝一日吸盡西江水一即向レ汝道居士於二言下一頓二玄旨一也千宗左需二齋號一因摘二吸江二字一授レ之他時老成之日參二得這公案一爐頭獲二安樂一矣

千宗左需花押一山僧雖レ未レ解二所由一據下被レ褐懷二珠玉一之意上以二玉字一爲二花押一應二厥需一爾

一　茶話眞向翁　（數の内竹隱の著）

昔或老人目うとく耳とをくなりて物書く事も得せねば苦るしかねて師の僧に餘命何をかせむと問ひしに茶をのめと答へられしかば茶をのみていかにすせむと重ねて向ひしにたゞ茶をのめ〳〵とばかりに示されしと云々

實に人眼耳うとくなりては何をかなさん萬事休するに加かざる可し唯茶をのめ〳〵と示されしは止る所に止れとの敎ならん易經艮彖曰止也時止則止時行則行動靜不レ失二其時一其道光明云々

されば達磨大師觀二中國一有二大乘根器一得々として來りて見二梁武帝一對譚するといへども帝敎を尊み常に持二論眞俗二諦一仍而不レ契遂渡レ江至レ魏過二小林一面壁九年也帝若契レ心禪を尊み師を敬せば他何ぞ面壁九年に及ばむ時未だ大乘の根機開らけざるを見て則ち止まるなる

可し是道の光明也二程全書曰看二一部華嚴經一不レ如レ看二一艮卦一斯れ
是等を云ふなるべし
愚人は生涯利路に走つて止る時を不レ知不レ得レ求休するとなし是に
示す夢窻國師の歌に

思ひ出のなき年月にこりもせて
なほ行末をたのむはかなさ

一　不言亭禪話

或人予に問て曰、茶禮は禪法にもとづくと聞けば、禪學をせずんば
茶の蘊奥には至りかたからむか、予答て曰茶に道心なし、翫ぶ人に
道心あり、禪者は茶禪一味と賞し、儒者は敬禮の一端とし、道者は
無何有の境とせん、何ぞ禪のみは茶道とせむ、或人云、茶祖珠光は
一休に參禪し、紹鷗利休共に禪者なり、古溪和尚利休居士へ西江水
の話を示されしを、居士言下に開悟して、茶の妙境を得られしとぞ、
然るにより古織は釜に鑄させられ、三齋翁は吸江の額を數奇屋に掲
げ賜ひしとぞ、今も千家藪内共に禪宗也、然るに茶に心なし、翫ぶ
人の受持する道を茶道とするといふは、此道の新規といはむか、答
曰、利休居士禪味と茶味とを一椀裏に喫得して、清規とせられし正
風は、予もとより仰ぐところなり、然れ共、三教は云はず、慈延師
眞向翁の序に、佛道の十宗をかゝけて三學をのべられたり、其くさ
〳〵の御法源は同じといへども、各其旨とする所ありて、天台は眞
言にあらず、眞言は禪にあらず、十宗各異なり、然るに禪意を得

ずして茶の蘊奥に至りかたしと云はんには、十宗はしばらくいはず、専修一向の門徒は、淨土信仰の外は餘事雜行としてかゝはらず、日蓮宗徒は、禪法天魔と破して捨れば、茶禪一味の茶は啜らじ、予が如き不學者は、神道之唯一、佛家之三學、儒家の五常といふことをも知らぬに、いかなる緣にしにや茶といふとにかゝづらひて、先達の跡を枝折に、曹溪の端をも歩み踏まよはじとたどるよりみるは、猶眇なるべけれど、彼の一眼國師の遺偈、利生方便七十九年とか云ふ語を拜して思ふに、分けのぼるふもとの道も、唯是利生方便にして同じ、雲井の眞如實相の月見ん外はあらじとぞ思ふされば、茶の道行學校は、任他貴は貴賤は賤をつとめ、事理言行一致に眞向かん茶人を、我は眞の數奇者とせん、腹に萬卷の書ありとも、言行齟齬せば何かはせむ。穴賢々々

一　珠光問答

將軍義政公召レ光問曰茶事可ニ得聞一耶。光曰。一味淸淨。法喜禪悅。趙洲是知己。陸羽豈得到ニ其佳境一耶。(中略)其入ニ此室一者外離ニ人我之相一內蓄ニ柔和之德一。至ニ交接相見之間一。謹兮。敬兮。淸兮。寂兮。卒ニ及天下泰平一也。源公忻然恨ニ逢之晚一云々。

一　澤庵和尙茶亭之記

此記は柳生但州の茶亭へ小堀遠州候と來話の節書れしと云ふ

茶の湯は天地中和の氣を本として治世安穩の風俗となれり今の人は偏に朋友を招て會談の媒とし飲食を快くし口腹の助とす且茶室に美を盡し珍奇の品をこしらへ手のたくみなるにほこり他人の拙を嘲る皆茶の湯の本意にあらずされば竹陰樹下に小室を構へ水石をたくはへ草木を植へ炭を置釜をかけ花を生茶具をかざる皆是山川自然の水石を一室の中に移して四序雪月花の風景を弄び草木榮落の時を感じ客を迎へて禮敬をなす松風の颯々たるを釜中に聞て世上の念慮を忘れ渭水の涓々と生るを一杓より流して心中の塵埃を洗ふ眞に人間の仙境なるべし禮の本は敬にして其用は和を貴しとす是孔子の禮の用をいへる詞にして則茶の湯の心法なりたとへば公子貴人の來座にも其交り淡薄にしてしかもへつらふ事なく又我より下輩の會席にも敬をいたしてあなどらず是空中に物ありて和して流れず久ふして猶敬す迦葉の微笑曾子の唯眞如玄妙の意味不可說の理なりされば茶室を構ふるより茶具を備へ手前會席衣類等に至るまでわずらはしからず美麗を好まず古き道具を以て心をあらたにして四時の風景忘れず諂はずむさぼらずおごらずつゝしみておろそかならずすなほにして眞實なるを茶の湯と云可し是天地自然の和氣を弄び山水木石を爐邊に移し五行備はる天地の流水を汲て天地の風味を口にあぢはふおほいなる哉天地中和の交を樂しむは茶の湯のみちなる可し

一　茶道安心論

堀　龍屋居士

夫れ竹陰樹下の小室、風呂釜の手前の如きは、風流は風流なり、嫻雅は即ち嫻雅なりと雖も、畢竟修行時の茶の湯にして、茶の湯も是れ限りにては復た半文錢の價値なし。之れを辿り之れを進みて、悟後の茶の湯に至りてこそ、始めて安心立命の法門ともなり、治世安民の要道ともなるなれ、然らば悟後の茶の湯とは甚麼、曰く此世界が直に是れ茶事なり、其は各々の一家は直に是れ竹陰樹下の小室にて、我々は即ち此小室内に、父母に招かれ來りし假の客なり。假の客なれば主人に對して、ゆめ〳〵不行儀の行ひ、無作法の所作あるべからず。心に叶ひたる食事に向ひし時は、結構なる會席の馳走と思ひて戴き、心に叶はぬ食事に向ひても、客の身なれば之れを譽め之れを悅びて食ふべし。夏の暑さ冬の寒さも、客なれば能くたしなみ、愼みて勤む可し。一切の家事一切の國事は、皆客の務めなれば餘念無く大切に盡す可し。決して疎忽に存ずべからず。夫婦兄弟、子孫奴婢迄、省相客の事なれば快くつきあい、己が心の儘ならぬとて、相客に自由ケ間敷と云ふべからず。又他に招かるゝとあらば、雪の朝月の夕雨の夜は更なり、大暑極寒の日をも厭はず、快よく行きて客の役を勤め、禮義を重むじ作事を終へて、亭主の心を慰め、相客にも悅ばせ我も樂みつゝ、ながの時移らば跡に少しの心をも殘さず御暇申して、もとの故里に歸り去るこそめでたけれ。歌に

妄想のかず穗の茶筌すゝぎなばきよき心の茶をも點つべし
かきたてし木の芽の泡と消へて世にこゝろ殘さず歸るふる里

一　又玄夜話

茶道とは敎へ事を能く心得知りて、道を學ぶが茶道にて、禮義式法に拘はるゆへ、道より入て其具〳〵の來歷を知りて、置くべき所に寸法たがはず置、其身も居るべき所を知りて居り道具より道具までの曲尺をも知り、氣より遣ふべき具、置くべきもの捨べきもの、其具〳〵の扱ひ時に取て怪我過あらむ時も、その仕樣仕方は正道の流儀より、其道をさけすむるはわきまへ有るべからず。されば道をよく鍛錬して、多年學び得て自得するを茶意とはいふなり。其道を知りて知らざる人を助け、學ぶものを導き、他に拘らずして我茶道を學び得て、爰を取彼を捨て、こゝを眞に扱ひ彼を草に略し、獨樂しみ閑居の氣を養ひ、心を靜めて大勇力として、茶を點するを道の敎へとす。是則禪道の意におなじき故、茶味禪味道一也といふ。禪より入る茶、茶より入る禪いづれも道は一也。ゆへに祖師大德の悟道し給ふ、一言一句を壁にかけて、其身も一念を抱いて、無心の心を學はむとする、是導者の一助なり。かく心懸けて學ぶ時は道に入るべし。されば無心の茶點ぜらるゝ也。無心の茶點せらるゝれば、一は世界皆友となりて樂の意深し。兎角茶道は禪道に心がけなくては、本意にかなはぬものなり。數奇者に墮るも、數奇にもよくなれば禮道へも入るべけれども、その修行のうち數奇といふ字義に拘はり、かの十德を着て中賣をいたす、狐に化かさるゝ族往々あり。

云々

一　茶禪同一味

千宗旦

茶事禪道を宗とする事

喫茶に禪道を主とするは、紫野一休禪師を起源とす。其故は南都稱名寺の珠光は、一休禪師の法弟なり、茶事を嗜みて日々行ひけるを、一休師見給ひて、茶は佛道の妙處に叶ふべきものとて、點茶に禪意をうつして、衆生の爲に、自己の心法を觀ぜしむる茶道とはし給へり。依て其弟子紹鷗も、泉州左海の南宗寺へ參禪すると云ふ。又利休居士も、紫野大德寺中參禪せしとは、世人の知れる所にて、一切茶事に用ふる所、皆禪道に異ならず。無賓主の茶、體用、露地、數奇、侘、此等の名義を始めとして、此の他一々禪意に非ざるは無し。委曲は考へて辨知すべし。是を以て、詩句に茶味に禪味を知量する旨を云へると實に格言なり。されば奇貨珍寶を愛し、酒食の精好を擇び、或は茶室を結構し、庭の樹木泉石を翫びて、遊樂の設けとなすは、茶道の原意に違へり。只偏へに禪茶を甘むじて修行せむこそ、吾が道の本懷ならめ、點茶は全く禪法にして、自性を了解するの工夫なり。釋尊四十九年來所說の經旨は、諸世界衆生の爲に本明を開發し給ふの義にして心外無法なり。其は種々因緣譬喩言詞にて、方便說示し給へり。茶事も亦方便知見に擬して、點茶するの所作に託して、本分を證得すべき觀法なり。凡て諸佛の敎化に別なし。然るを當今茶道を誹斥したる書數多世に出で、非禮の禮を行ふなど、口を極めて詈れど、其は禪意埋もれて、異しき情態に變ぜる末を取りて咎むるなれば妨げなし。若し

本來面目を理會せば、何ぞ必ずしも誹り言はむ、特に禪茶には、禮に勝れる重き道あり。さすれば禮をのみ執ずるも、落邊際の見なり。禮を以て佛法の妙所に比すれば、大千世界の一島に等し。禮は枝葉なり、金剛經の註に、雖レ行二仁義禮智信一不レ可レ敬名二人相一云々。老子に道德を毀ちて、以て仁義を爲すは聖人の過なりとあるは、末始有物の先より存在せる、玄々微妙の大道にして、人爲を假らぬ自然の理を云ふなり。是の理を領悟す可き禮茶の工夫を非るは、自暴自棄の妄人にして己が拳を以て己が頭を撲ち破らむに類せり。吾が門の人、愼みて此一大義を尊奉して、禪味の眞茶を修行す可し。

茶事修行の事

夫茶の原意は器の善惡を擇ばず、點ずる所の容態を論ぜず只茶器を扱ふ三昧に入りて、本性を觀ずる修行をするに在り。扨て茶事に託して自性を求むる工夫は他に非ず、主一無適に一心を以て茶器を扱ふ三昧に入るに在り。設令は、茶杓を扱はむなれば、其の茶杓へのみ純ら心を打入れて、餘事を微しも想はず、始終扱ふとなり。又其の茶杓を置く時にも、前の如く心を深く寄せて置くなり。是は茶杓に限らず一切取扱ふ器物、何れも右の意に同じ。又其扱ふ器物を置きつけて、手を放ち引く時も、心は少しも放たずして、其の次に扱はむとする器物へ、其の儘心をよせ寫して、何處までも氣を縱すべからず。形の如くにして點ずるを、氣續點と云ふ。只茶三昧の行ひなり。了解は其人の志に由りて、強ちに年月を渉るに及ばず。只起一念の深淺に在べければ、只管心を專らにし、志を盡して、茶處の三昧修行を勤むべ

し。三昧とは梵語なり。飜譯して正受といふ。何にもあれ一心を一處に注がしむるをいふ。遠法師曰く、三昧と稱する者何ぞ、思を專らに相を寂するの謂なり。思專らなれば則ち志一にして分れず、相寂すれば則ち氣虛にして神朗かなり。氣虛なれば則ち智恬に照らす、神朗かなれば幽として徹せざるは無し。斯の二乃ち是れ自然の玄符、事二にして而して用一致なりと。又法華經に、靜室入ニ禪定一一心一處坐、八萬四千劫とありて、一坐の觀法は八萬四千劫なりとぞ。茶場に入りて三昧を修するは、則ち一坐の觀法なり。又優曇寶觀に寶王論に云く修ニ持一相念佛三昧一繫レ念不レ忘、縱令昏寐亦繫レ念覺即讀レ之とあり。此等に倣ひて點茶し、二六時中懈怠なく一處に繫念して、偏に勇猛心を發し、修行三昧に入べし。扨茶器の扱ひを以て本性を觀ずるは直に坐禪工夫の敎なり。坐禪とて靜點し居るのみが工夫に非らず、夫れをば闇證の坐禪とて、天台の智者も嫌ひ給へり。故に去來坐立共に行ふが坐禪の要法なれば、茶事にても是の如く、行住坐臥懈怠なく修行すべき事なり。但し茶事にては、行住坐臥の行ひは成るまじと、或は疑ふべけれど、結局行はるゝものなり。如何にとなれば、常々茶室に入て點茶修行する折の如く、專ら意を用ひて悉く、一切の義を行ひ、行住坐臥に油斷なく勤むる事なればなり。日用動靜の間、油斷なく此の意を施して事を爲せば、思慮を勞せずして、一切能く調ひ、君臣父子人倫の道も、自然と其の極處に至る可し。特に彼の坐禪觀法は、兎角無量の念想浮び出でゝ煩はしきものなれど、深く工夫すれば、其工夫に壓されて餘念起らざるなり。されど元來容を假りて行はざ

る故、輙もすれば工夫の一念、餘念に混じて、紛擾の憂を生じやすし然るに茶道は肢體を活動して、其の物を扱ふ故、心を彼れに寄托すれば、他情に奪はるゝ事なく、且工夫を盡すに難からず。是れ即ち一休禪師の妙智に出づ、實に感賞すべき妙道なり。

茶意の事

茶意は則ち禪意なり、故に禪意を置きて外に茶意なく、禪味を知らざれば茶味も知られず。然るに世俗に茶意とする所は一箇の趣を立るを云へり。其の立つる趣を眞の禪茶意と認めて、證入したる氣色に顯はれ、增上慢を生じて、妄りに人を誹謗し、世上の茶入皆茶意を知らずと謂ひなし、或は茶意は詞を以て說く可からず。容を以て敎ふべからず。己れと觀じて領解せよと云ひ、此れを敎外別傳なりと思ひて、獨り悟りたる邪見を起す。是れ皆趣のなす業なり。されば我が建てたる趣と他の趣とに、彼我の隔てをなして、人は悉く茶意を識らずと嘲り笑へど、趣は人々に在りて人々に替はるものなり。我が趣に異なるを互に誹るは、爭訟の基にして、慢心益々募り、遂に惡趣の俗茶が面白く成り行き、一切の邪想隨て生ずるなり。夫れ趣は到るの義にて、彼の善惡業の因より、有情の物を其の生處に到らしむるも是なり。六趣の迷論とは、蓋し此れに迷ふを云ふなり。故に佛法には心を動かすを第一の破戒とす。心を動かさぬが禪定の要なれば、趣を立てゝ萬事を行ふは、禪茶には極めて嫌ふ事なり。然れば其心を動かし、向ふを主として茶事をなす故、本來の禪機とは顚倒せり。凡て趣は一切の物を執じて心を動かし、思慮作爲を用ふる意なれば、佗を以て心

を動かす故に奢を生じ、器物を以て心を動かす故に法を生じ、數奇を以て心を動す故に好を生じ、自然を以て心を動かす故に創意を生じ、足を以て心を動かす故に不足念を生じ、禪道を以て心を動す故に邪法を生ず。是の如く心を動かすは、皆惡趣の因なり。是等は正に常樂我淨の四顚倒を好み求むるに幾し、經文にも人の命は呼吸の間に在と說き給へり。然れば命は須臾に終りて、身は無常なるを常と思ひて、奇物珍器を聚めて秘藏し、無益の寶に念着して生涯を送る。又心は不樂なるを樂と思ひて、茶室や庭やに過分の貨を費し、調理の好惡を擇び、賓客の應接に思ひを勞して、最上の樂みとなす。又法は無我なるを、人々各々得たる趣に誇り、己が所作をば何事も是とし取りて、他を輕侮し、我を立て、偏見に滯り、或は一切不淨なるを淨と心得て、潔からぬ事を嗜み行ひ、却て是れを潔き事と思て、淸淨心を穢す。是れ皆世俗の悅ぶ茶事にて、實に四顚倒の惡趣なり。法華經の註に、愚痴樂に放逸、常受に諸苦惱とあり。夫れ一切衆生は、垢重く情深く、無始以來色塵に迷ひ、無益の事を樂みて、諸の苦みを受け、三界六道に轉じて、處々に生を受くるが故に、衆處に生ずると云ふ義を取りて衆生とは云ふなり。若し衆生の苦惱を免れむと思はゞ、一向に信を起し禪茶の門に立ち入りて、得道解脫の工夫を起修すべし。夫れ凡夫の行ふ所は、善惡ともに惡なり。夢中の事は有無共に無なり。迷ひの間の邪見は、是非凡て非なり。されば世俗の趣を偏執して眞善なりと云ふとも、何ぞ信を取るに足らむ。却て益なき逸樂に時を移し、徒に光陰を送らば、佛陀大聖の敎化に背馳して、茶道の罪人なるべし。只寸

陰を重むじて、刹那際も退轉なく、禪茶の德用を以て、妙道を修行するこそ肝要なれ。

茶器の事

禪茶の器物は美器に非ず、寶器に非ず、圓虛清淨の一心を以て器とするなり。此の一心清淨を器として禪機の茶なり。されば名物抔云ひて、世に賞玩する茶器は貴ぶに足らず。何ぞや、一盌の茶を啜るに無價の器を購ひ、庫裏に秘して寶となさむも、道に於て更に益なし。小人貨を懷くは、適々災害を招くの媒なり。老子に不レ貴ニ難レ得之貨一使ニ民不レ爲レ盜とも云へり。物じて器物の善惡を論ずべからず。善惡二つの邪見を斷じて、實相清淨の器を、自己の心に索め得べし。抑も一心の器は、人の作爲陶鑄せるものに非らず。天地自然の器なれば、陰陽日月森羅萬象、百界千如も同じ理を具足し、亮朗として月の照すに等しき、虛靈不昧の佛心なるを、己れと煩惱の雲を起して、眞如の光を蔽ひ、五塵に染まりて放まゝに情慾を生じ、貪瞋痴の三毒を發して、一心清淨に變じて三毒の器を成就す。されば世間の衆生は、空劫以來五濁に穢着して、己が器の麁惡なるを覺えず、既に無明の聚結なれば、善と誇るも眞の善に非ず。老子に天下皆知ニ美之爲レ美斯惡已。皆知ニ善之爲レ善斯不善已と云へるは是れなり。是れを例へば、香に瀆れたる人の、其の香を指して聞知せざるが如く、行ふ所皆惡趣なるが故に、專ら禪茶の巧用を以て、穢惡を捨てゝ、本來清淨の器に入れ替ふべき事なり。法華經に、力是堪レ受ニ善器一也と宣給へり。故に力めて修行せば、下根も必らず善器を受くべし。設使成就せずとも、禪茶の

門に立倚らば、終には善器となるべし。家語に與ニ奸人一同行如ニ厠中居一雖レ不汚レ衣、時々聞レ臭與ニ惡人一同行如ニ劒中行一雖レ不レ傷レ人、時々驚恐とあれば、苟且にも惡道には由る可からず。因は必らず果に至るの習ひにて、惡に由れば惡所へ趣き、善を好めば善趣に趣く道理なれば、偏に勇猛心を奮起し、懇に禪茶の工夫を盡さば、現世には王者の牢獄を免れ、死して三途の門戸を杜ざし、升天得道疑ひあるまじ。是の如く成就したるを、天地同一、圓虛清淨の寶器とす。此れを禪茶の器と稱す。古甌陳器非常の奇玩も、是れに對して何の價かこれ有らむ。

露地の事

今世俗、茶室の庭を指して、內露地外露地と稱すれど、本義に於て甚だ相違せり。本露地と書くは、露はアラハスアラハルと訓じ、地は心の謂にて、此の自性を露はすの義なり。一切の煩惱を離斷して、眞如實相の本性を露はすが故に、露地と云ふ。又白露地と云ふも同じ、白は清淨なるを謂ふなり。此の義を取り來て、茶室は本性を露はす道場ぞと云ふ意にて、露地とは名づけたるなり。故に露地は茶室ありての一號なり。又不毛の赤地の廣莫として潔淨なるをも、露地と號す。是れも亦本性に況へたるなり。法華經の註に、四衢道中譬ニ四諦一也、以ニ其四諦觀、同會ニ見諦一如ニ夫路頭一所ニ以名四衢也一、若見惑雖レ除、思惟仍在、則不レ名ニ露地一也、若三界思盡、方名ニ露地一耳、云々とあり。又道場と云へるも、露地と同義なり。止觀に道場は即清淨界也と出でたり。故に五住の煩惱の糠を治め、實相清淨

なる本性の米を濕ほすと云ふ意にて露地と云ふ。道場と云ふも異なるをなし。又茶室を別世界など云ふも、自心を比したり。佛語に云く、世界非二世界一、是名二世界一と、應無所住生而其心の意なる可し

○禪茶餘韻集

賀二利休居士一偈

古溪和尚

泉南之抛筌齋宗易者。予三十年飽レ參之徒也。禪餘以二茶事一爲レ務。頃辱特降二綸命一。賜二利休居士之號一。聞二斯盛擧一不レ堪レ歡。聊一偈以抒二賀忱一云。

龐老神通老作家。飢來喫飯遇二茶々一。心空及第等閑看。風露新香隱逸花。

利休居士肖像贊

春屋國師

頭上巾兼二手裏扇一。儼然遺像舊時姿。趙州且坐喫茶底。若非二斯翁一爭得レ知。

仝生前像贊

畫狩野永德筆

市中トレ隱。常避二塵緣一喫三巡レ茗。當一味禪。

利休居士幼容贊

古溪和尚

喫茶入レ道是盧仝。面目依然畫二太空一。莫レ問斯翁歸去處。天遊眡後一清風。

抛筌齋利休肖像贊

藪內竹心

古溪千丈水。汲盡利休翁。曾得二無生故一。即今不滅躬。

仝上

匡道禪師

室内工夫參趙州。且座喫茶也風流。火爐頭話有賓主。萬嶽松風一鼎收。啼。三歳兒童知利休。

現建仁默雷禪師

仝上

茶禪兼達謂是茶人。何人如此利休其人。

仝上

茶道本出禪學。離煩擾爲體。醒昏睡爲宗。煩擾能絶則法性現前。昏睡實滅則眞機透脫。錯莫入邪徑。

利休居士辭世

人世七十。力圍希咄。吾這寶劒。佛祖共殺。
提さぐるわが得具足の一つ太刀今此時ぞ天に抛うつ

天正十九年二月二十五日　利休居士宗易

偈　武野紹鷗

曾彌陀結無疑印。宗門更轉活機輪。量知茶味與禪味。吸盡松風心不塵。

少庵　宗秀和尚

肩着僧衣。松竹圍家。識得石鼎趣。味得趙州茶。

少庵辭世

未後一喝　倒破牢關　活機轉去　綠水青山

今日庵宗且肖像賛　圓明禪師

今日庵中舊主人。一生竟不走風塵。莫言這裡絶消息。寫出丹青面目眞。

元伯宗且辭世

一息截斷咄々喝々。即今轉審作茶烟。

如心齋辭世（天然宗左）

生也天然。死也天然。畢竟如何。天然々々。

孤逢庵寰海和尚

吽翁宗左肖像賛

旦汲建溪水。暮參郝老禪。華前與月下。萬盧忘茶烟。

吽翁宗左

利休居士二百回忌偈

月下風前供一啜。禪餘冷暖碗中浮。斯翁七十成何事。名利雖休休未休。

大德無學和尚

爲啐啄齋宗左

非人非牛座爐頭。分明不審歴中主。一聲馳扶桑六十洲。

珠光

臨濟鋤茶。潙山摘茶。趙老喫茶。雲岩煎茶。古德因茶商量。這事太多生也。珠光老人。曾參吾龍王山裡。禪而專嗜茶之奥。不會得敎外之心。豈得作這般之語話乎。可謂知禪味而嘗茶味漢也。

紫阜下呆納破山鞋子　亂道

須貴

紫野大心和尚

古人喫茶。茶禪一味。元來々々。此術須貴。

喫茶去（次韻）

三德庵仙樵

且座喫茶三味時。心空煩腦入禪期。更尋松風到幽趣。眞如月縣千仞枝。

○附錄

一　利休居士の悟道に付て

星野天知

松籟は俗骨を曝して草庵一縷の茶の煙りに浮世を看破したる幾多の道人が、歌ひに歌ひし風雅の道久しく絶えて「さび」を言ふ者稀れになりぬ、東洋審美に特得なる風雅の「さび」は禪の幽味に發して芭蕉の俳道と成り利休の茶道と成りけん、此二人は共に禪に因りて斯道を興し相携へて日本に風雅の天地を開き、詩想道念固より差別なきにあらぬも斯道の爲めには同腹の胎兒たりしや疑ふべからず。居士は「佗」を斯道の生命として卑俗の風雅を戒めんと勉めり、塵の人紛々として塵の塚を築きては崩し崩しては又築き、之れに「金殿玉樓」と命じ、之れに「珍寶奇貨」と名づけ、塵に迷ひ塵に誑らかされて「燦爛」と思ひ「華美」と喜ぶ、風雅の神いかで塵塚に宿らんや、夕顏棚の下涼みにも風流の趣味はあり、棟割り長屋の荒筵にも風雅の匂ひ籠らざらめや、

城邑山谷其地を撰ぶべからず、窗ひさしのあはれ柱のよろぼひたるを恥づべからず、唯心の平坦を思ふべし、いかなる大人貴客も此院に入ては世路の華美を忘れ塵網を蹈破して雲外の賓客と成る、匹夫も爰に腰を折るを許さず。

居士は最も平民的なる最も靈性的なる固有の性質を以て其一身は能く風雅と融和し、其風雅の一擧一動を以て只管人を美育せんと欲せり、世は天龜元正の箭叫びに驅られて荒らびに荒れし人の心を「親

切」もて和らめ導かんと心を用ひ、茶はさびて心はあつくもてなせよ道具はいつも有合ひにしてと、偏へに物質的の流弊を戒しめてさびの重んずべきよしを敎へ、一方には又風雅のうろたへ者を輕笑す、とめ得れば心の奥の草の庵を山深しとは何思ひけんといふが如き、風雅の「さび」を形象にて言はゞ「草庵」一つに極まりたり、此草庵いづこにか有らざらん、さるを囂々しく世外に求むるとやあると嘲る、彼れが偶然に動かしたる一手も、彼れが無心に切りたる竹片も悉く風雅の味ひあらざるなく、其一語は茶事の法律となり其一筆は茶人の經書と成る、利休窻庵に一碗を味ふの茶人が、ストラトフオードに鉢を曳くの文客や、芭蕉庵に雨滴を聽くの騷客と其感想を同ふする所以のもの、豈所以なくして可ならんや、況んや彼れは微々たる

泉州沙界今市の一市人一嘯すれば万岳震ふべき一大暴虎豐臣太閤をして、掌上の猫兒たらしめ以て其手を舐らしめしに於てをや、吾れをして先づ其起り來りし機運の有樣を觀んとを許せかし。

人情の傾く所到底社會現況の正反面に注がざるを得ず、社會のリズムは常に斯くして其機運を喚び起し來る也、殺氣天に冲いて人みな心すさみに荒み、滿天の狹霧は血となりて社會は騷がしきに倦み荒らびを厭ふと爰に久しく、ひたすらに和と靜とを渴望して止まざるなり、此必要に促がされたる機運は、和と靜と敬と寂との四要素を以て茶道として現はれたり、珠光庵主一休和尚に參禪して始めて茶の湯を興し、室町將軍の聲を以て大に社會に紹介せられ、信長之れを歡迎し秀吉亦率先して偏へに茶室の閑靜を喜び淸談秘議の席たら

しめしと共に茶人を愛好すると一方ならず、然れども因習の弊は漸く俗化して奢美隔俗に流れ風雅の道爲めに誤たれて殆んと荒敗し去らんとし、斯道の危機實に一髪の間に懸る、時に風雅の神未だ日本を捨てずや、一のマナを降して風雅の世界を饑えしめず、マナは田中與四郎の名を以て納屋の魚戸が家に降れり、此一市人與四郎は物質的競爭の戰國に生れて利の貪り得べきことを聽きたり、名の成し易きことを見たり、然れども彼れが一種の好奇心は其本性を喚起して、十七歳の時既に風雅に心を寄すると久しく北向道陳宗匠に茶道を學ぶと淺からず、其奪ひ難き心は密かに宗匠を愕かしめけん、「與四郎といふ者茶道に心を寄せて我方へ節々來けるが茶道惡からず、雅談も詞やさしく聞傳ふ云々」と道陳をして紹鷗に談らしめたる如き、既に此少年は當時天下に有名なりし二宗匠の眼底に其非凡の光を射入したりしなり、紹鷗奇として之れを口切りの茶席に招く、彼れ三日の延引を乞ひ法體して來る、紹鷗愕きて其所以を問ふ、彼れ言へり「お口切りぞめに召寄せられしと忝けなさの餘り姿を易へて候、京へ十德衣を誂へし故日延べを乞ひて候」と、彼れ愈々奇なり、彼れ斯道を敬重したる熱誠の弟子として愈々奇想を懷けり、彼れが此擧動は淺らかぬ決心を現はして終に千宗易抛筌齋と稱號するに至れり、然れども是れ未だ道の利休たるを得ずして僅かに技の利休たるしのみ。」

技の利休二變して道の利休と成りしは偏へに禪の修養にてありつつなり、普通國師はそが剃髪の師にして更に高聖なる古溪和尚に參禪

するに至りいよ〳〵幽邃の禪境に逍遙して玄に參し妙を窮め、一心を激勵工夫すると多年、骨硬くして奪ひ難き氣慨と、血多くして消え難き功名心とは、幾多の苦悶を經て内に沈靜し外に融化し、苦みに苦みて僅かに解脱の一路に脱れ、豁然として物界の區々を看破し

三界の火宅を出でゝ白露のかゝるところは松風ぞ吹く

彼れは斯く味へり、顧れば胸間は芥の捨てどころ、吾れは塵に埋もれたる一個の醜鬼のみ、我れ清かりしと思ひし昨日の非なるを觀じ、むすびよる垣ね清水影みへて心の底のはづかしきかな、一句了然として百億を超へ、案を打て一の如意珠を解せば、了了として眼中塵なく心洞開して「我」は宇宙に濶歩する「活人」たるを自得し、軒端もるあま照る月の御影にも心晴れては恥べくもなく、一切の聖賢衆生は唯大千沙界の電拂と閃めき、鐵棍一揮し來れば美人皆これ骸骨、社會はこれ小器の俗兒が自作せる自縛の牢獄、君子と言ふ者そもそも局量、豪傑といふ者そも〳〵小兒、浮世は假りの一旅寓のみ、たれひとつ壁の隅なるつり竹の世はたゞ假りをわびてこそ住め、一たび一喝すれば疾風嘯々と聲ある如く、千々万々の門戸碎破して豁開せざるとなく、一朝頓悟の辻に立て顧れば、引かこふすだれ屏風のたゞひとへ浮世はさても隔てられけり、彼れ既に斯く悟了するも人世は決して空虛なりと冷視するを得ず、栴檀林中雜樹なく欝密森沈として唯一つ勇猛の獅子王を見るのみ、此獅子王實に人世の羈絆にして、浮世は火に燒け水に溺れ去るも、一切の眞理此一點に含まれて滅びず、悲慘絶望の境に陷るも虛無恬淡の淵に眠るも陶然として

幽かに人世を顧みて微笑もの、實に此一點あればなり、枯木寒鴉を宿すのところ日はうら〳〵と照すが如き此人世の慈愛は、世を遁れていよ〳〵世に近づき世を厭ふていよ〳〵世を愛す

松の門ひらくも清き月の下にあやしや人のたゝく音する

彼れはふつゝかなる樂天家には非ず、又はしたなき厭世家にも非ず、禿々たる枯木なほ一蕾の存するあり、冷々たる死灰なほ一點の火氣あるを見る此間實に人世玄妙の至味、一蕾たゞ了し來れば百花爛熳點火たゞ了し來れば烈火炎々居士は此一顆の蕾一點の火氣に勵まされて塵中に蠢動く叫喚苦悶喘々たる俗兒を救はんと決意して、道を傳ふるの心轉た熱注したりき、折りためてすくはざりせばいかばかり世に迷ひなん罪の〆〆と嘆奮せしむるに至る、之れ居士が隱遁の禪僧と成らずして茶道の宗匠を以て一生を委ねたる所以なり、人世固より非事多く憂苦に滿てる涙谷なりと言ふとも其非は即ち人世の價値ある所、憂苦を嘗め悲哀を味ふて後に獲たる光明の世界にあらずんば、明悟得道の樂天大世界たるべけんや、苦、善なり、悲善なり、總ての非みな善ならぬなし

くれ竹の世のうきふしをずた〳〵に引切てこそ茶の湯なりけり

彼れは此秘奥を茶道の本體として歌ひたり、而して聖俗善惡併せ呑むの巨想は靜かに排他の小量を愍れむ

わが庵は來らぬ人も來る人も親しきうときいふこともなし
いづかたと定めてあけし窓もなし月と雪との影にまかせて

形骸に拘々せず、小智に區々せず、清濁のまに〳〵呑み盡して始めて如來禪を覺了すれば萬行體中に圓かなり、

露地數奇やよろづの物を粉となして打ち入るゝをや茶入といふらんたゞへたる茶の色のみか一口に空のみどりも海のみどりも

彼れは風雅徹底して滋味を具さに嘗め、飄々として宇宙に瀰蔓する風雅の靈美あるゝを看得し、自然の大界に滅し難き一美の燦々として生じ出るを見る

野も山もひたし入れたる筒の中に花は心と生ひ出でにけり

終に慨然として風雅の爲めに一身を捧げ、廢道を矯正して爰に侘茶の九道を新設するに至りたるなり。

居士は斯くの如く破俗超脱して松風の聲に眠り、無爲恬淡として到達せざるゝなき思想界に高臥せり、人世毀譽の外に立ちて大千沙界に抵觸すべきものあるべくも思はれず、然るに太閤の權勢に衝突して、利休めは兎角果報のものぞかし菅相丞になれりとぞ思ふと、笑ふが如く嘲るが如く怨むが如く悲むか如き聲を放つて寃罪に怨死するに至りしはそも〳〵怪しむべきに似たり、然れども深くこれを考ふる時は其故なきにあらず居士が修禪の苦行もて漸く解脱の境を蹈み越へしが如しと雖ども其解脱し難き本性は唯一點胸の秘奥に潜伏し居りしなり、此一點の肉性は豐臣太閤に非常なる熱望を以て召出さるゝに至り、けがさじと思ふ御法をともすれば世わたる橋と成ぞかなしさと慈鎮和尚が歌を口吟みて、其最愛の古郷たる閑靜の草庵を

依々戀々として出しにも係らず、終に三千石の厚遇に安眠して權勢高く一世を靡かするに至り、漸く膨脹して居士を魔殺し、識らず知らず其固有の才智を誘驅して才智忽ち利休の聲價を賣り忽ち又利休は此才智の爲めに賣弄せられしなり、當時有權の諸侯は多く利休に師事して其才能達道に敬服し、人望は嘖々として水の低きに集る如く、屢々太閤殿下をすら屈伏せしめて陰然或一種の權力を天下に握るに至る、殊に小田原陣中に太閤の大軍手を束ねて北條氏政の勁敵を破り能はざるの時、其咨詢に應じたる一言の軍略が忽ち堅城を陷落せしめたるが如きものは、才智の秀吉をして其極まりなき大才智に畏懼せしめ、遂に天下を覬覦せらるゝの疑懼を懷かしめざるを得んや。

居士が賢妻に宗恩なる者あり、太閤に昵近して其才智と膽力とは居士をも忸怩たらしめし人物にてありし也、此妻は居士が分身の生命にして居士を居士たらしめしもの、思ふに此賢妻ありてなるべし、されば才智と意志とに發達せるの妻女は、往々情に缺る所あるも我れさへ人さへ完全の女子と許すとあり、居士は此敬服したる合氣の賢妻に安んじ騎虎の勢ひは其才智に二倍の强力を勵まし、失敗蹉躓を招くまでは自己も得々として俗化するを知らざりしなり、嗚呼居士を誤たしめたる者二つあるを知る則ち太閤たる秀吉が過分の信任と此才能智性の賢妻と之れなるべし。

時勢に歡迎せられて大に騏足を延べたる如く實に時勢に衝突して不幸の天地に生れたる者天下に多しとせば、居士は其一人なるべし、

俗は到底雅の伴侶ならんや、物質の陋眼僻見は終に物質外に出るを得ず、風光霽月静かなる雅人の胸中を誤たざらんとするも得べけんや、曾て秀吉が牽牛花見物の入來に際し、唯水盤に一輪の花を浮べて風雅の致を現はせしもの、端なく其失望の怒りに觸れたる如き又言ふにしも堪へず、居士は何故この久戀にあらざるの地位は早く辭せざりしか、正親町上皇の勅を受けて、茶具を製し居士號を賜はるの恩寵を受けしことが得意の心を助長せしめしにあらずとも、俗見の喝采に志を高ふして物質の社會に捨て難き思ひありしや悲むに堪えたり、其資財を擲ちて閣を紫野山門に架し自己の木像を安置せしが如きは、多少物界の俗化を受けたる兆候ならずとせんや、秀吉の憤懣は果して牽牛花にありしや、利休の木像にありしや知るべからず

と雖ども、居士の愛嬢もづ子を妾に參らせざりしの一事は爭ふ可らざる激憤の偶機にてありし色情の野卑なるも其力は戀情の飛下劇落せる大瀑と異なるとなく、秀吉が多年疑懼猜厭の焔は此貪色の絶望に激發し、天下を如意と信じたる驕傲の心には、日頃何事も勝つと難きに業を燃しつゝ、終に勝具唯一つを存する所の權力を以て、背逆の罪ありとして自刃を宣告するに至りぬ、居士が一點解脱し難き生血は幼時魚市の中に生活して獲たる所の燃ゆるが如き氣象を喚返へして、一身の大厄時に躍然と胸を衝き來り、權と不法とに屈し難き熱するが如き腸は、いかに怨恨悲痛なりけん

提ぐる吾が悟具足の一つ太刀今此時ぞ天になげうつ

斯く猛然として人世を勇退するの獅子吼を爲し、彼れは泣かずして

屠腹し逝けり。

彼れは泣く人に非ざるか、然り彼れが歴史は涙に非ず情に非ず、才智と意志と歴史なり風雅と美術の歴史なり、寧ろ禪が技術に現はれたるの歴史なりし、然はあれども彼れは斯道の前途を思ふては、悲痛の涙を注ぎたるなり、道奥の秘として「吸盡西江水」の五文字は、必ず後世俗兒の味ひ得ずして遊藝の末技に流るゝとを危ぶみ、彼れは横難凶變の前年三齋翁に心弱〳〵しく談るらく

近頃は筋なき置合ひいろ〳〵流行し茶の本意を失ふとすえ〳〵思ひやらる、唯慰み物となりはせずや、頼みに思ふ弟子は五六人に過ぎず、其中是れぞと思ふは三四人なり、集雲庵の宗慶等は執心の者にてよく〳〵傳へ置きぬ、子供儀も未熟ゆへ御目をかけ末〳〵宜しきよう頼み申上候

何ぞ其聲の悲しきや杞憂果して今日の豫言と成りたるの不幸を悲しむ、斯道の爲めに一身を捧げたる居士の生命は美神の妬みを受けて俗界の手に無念の血を染めたりと雖ども、天正十九年辛卯二月廿八日は唯居士を宿したる七十四年間の形骸を脱したるの時に非ずや、流水滾々淀まず竭きず葦は枯れ葦は生ず、紫野聚光院に露深き夕べ、苔の匂ひに古人を想ふて寂寞たる墓場に往し昔しを忍べば、無常是れ常、不朽是れ朽、彼れも逝くらん是れも逝くらん』

茶禪一味 終

明治三十八年二月廿七日印刷
明治三十八年三月廿八日發行

定價金廿五錢

著者　田中仙樵　東京市神田區駿河臺西紅梅町十番地

發行者　平本正次　東京市牛込區市ヶ谷加賀町壹丁目十二番地

印刷者　天野耕一　東京市牛込區市ヶ谷加賀町壹丁目十二番地

印刷所　株式會社秀英舍第一工場

發行所　東京市神田區駿河臺西紅梅町十番地
（電話本局二千九百九十九番）　光融館

不許複製

光融館出版書籍地方大賣捌所

名古屋	同	同	岐阜	岡崎	京都	同	同	同	油小路	同	同	同	五條	六條	二條	大阪
同	同	廣島	備後町	博多	分											

永瀬東代書	川崎太右衛門	文次郎	其中光文	郁文堂	伊藤書	貝葉書	出雲寺	興道教書	顯法藏書	爲勘兵	法枝	村上	若林書	柳田書	吉岡書	柳原兵
積善館支	積心館書	洗善館支	吉岡平	甲斐治												

同	同	横龍札弘仙新松長三水長富高金	同	同	福	熊	井本	澤	岡山	原	條	野	本	潟	臺	前	幌	野	横

長崎次郎	品川右衛門	酒井兵	平澤潤	日安源	宇太書	學海六	宮十	新書	中光書	目黒太	西田書	樋口書	西村	朝都	高澤	北美	藤泉	今井	富崎	伏見	有道	弘貴	勉強
堂	堂	堂	堂	郎	店	郎	館	店	社	店	郎	館	店	平	郎	店	堂	館	助	衛	門	郎

光融館出版禪學書類

天桂禪師提唱（三版）

碧岩錄講義

▲和裝帙入全三冊定價貳圓七十錢▲洋裝全一冊定價貳圓五十錢小包料各十五錢

山田孝道師校注（三版）

禪門法語集

洋裝定價一圓五十錢小包料十五錢（三十種三十三冊合本凡八百頁）

森大狂居士校注（再版）

續禪門法語集

洋裝定價二圓小包料十五錢（三十五種四十一冊合本凡千貳百頁）

山田孝道師著（四版）

坐禪用心記 普勸坐禪儀 講義

全一冊 定價二十錢 郵稅四錢

碧生國榮師著

寒山詩講義（再版）

和裝　定價四十錢
郵稅六錢

森大狂居士參訂

一休和尚全集（三版）

和裝　全一冊三百頁
定價四十錢郵稅六錢

禪學編輯局參訂

白隱和尚全集（再版）

和裝　美本　三百頁
定價四十錢郵稅六錢

森大狂居士參訂

禪林叢書　第一篇

和裝、東坡禪喜集、澤庵和尚垂示、正眼國師眼目、定價三十五錢郵稅六錢

仝

禪林叢書　第二篇

和裝、居士分燈錄、道元禪師和歌集、法燈國師法語、定價三十五錢　郵稅六錢

釋宗演師著

寶鏡三昧講義

大內青巒居士著

碧岩錄十則講義

高田道見師著

十玄談講義

江村秀山師著

僞仰要路講義

（品切）

一冊　定價五十錢
郵稅六錢

山田孝道師著

證道歌講義（三版）

全一冊　定價十六錢
郵稅二錢

山田孝道師著

信心銘講義（再版）

全一冊　定價十錢　郵稅二錢

東山頌禪師著

達磨禪經說通考疏

美濃大判　全六冊（品切）　定價三圓　郵稅卅錢

若生國榮師著

通俗平易　**活禪談**　第一輯（四版）

全一冊　定價貳拾五錢　郵稅四錢

通俗平易　**活禪談**　第二輯（三版）

全一冊　定價貳拾五錢　郵稅四錢

禪學合本

第一卷十冊合本五十五錢第二、三、卷十五冊合本七十五錢第四卷十冊合本五十五錢第五卷十冊合本五十五錢郵稅各十錢

釋宗演師著

靜坐のすゝめ（三版）

定價貳錢　郵稅四冊迄貳錢

織田得能師著

大乘　**起信論義記講義**（再版）

全一冊　定價七十五錢　郵稅八錢

島地默雷師著

維摩經講義（三版）

全一冊　定價三十八錢　郵稅四錢

大內青巒居士著

原人論講義（六版）

全一冊　定價二十五錢　郵稅四錢

全

般若心經　佛說法滅盡經　**講義**（六版）

全一冊　定價十五錢　郵稅四錢

釋宗演師著

金剛經講義（再版）

和裝全一冊　定價貳拾錢　郵稅四錢

山田孝道師著

佛教すゝめ（三版）

全一冊　定價三十錢　郵稅六錢

曹洞在家日課要集

定價八錢　郵稅二錢

山田孝道師著

學道用心集講義

全一冊　定價三十錢　郵稅四錢

白隱禪師著

ねぼけの目ざまし（再版）

定價六錢　郵稅貳錢

新刊雜著

鷲尾順敬先生著

日本

佛家人名辭書

全一冊　定價九圓　郵稅五十錢

山田孝道師著

禪門鐵鎚

殺活自在

全一冊　定價貳拾五錢　郵稅四錢

齋藤唯信師著

佛教倫理の大觀

大和綴全一冊　定價十二錢　郵稅四錢

安部正人編

鐵舟隨筆

全一冊頗美裝　定價六十錢　郵稅十錢

若生國榮師著

禪學入門

短刀直入

全一冊　近刊

村上專精先生著
大乘佛說論批判
全一冊 定價五十錢 郵稅八錢

曹洞宗務局文書課編纂
修證義說教大全
（新版）定價五十五錢 郵稅六錢

後藤北溟禪史著
修養禪語
（新版）定價廿五錢 郵稅四錢

田中仙樵先生著
茶禪一味
全一冊 近刊

若生國榮師著
三同契 寶鏡三昧 講義
全一冊 近刊

94
319

94
319

019728-000-1

94-319

茶禅一味

田中　仙樵／著

M38. 3
ABG-0533